JCC

沖縄支部設立

20周年記念誌

社団法人
日本補償コンサルタント協会
沖縄支部

JAPAN COMPENSATION CONSULTANT ASSOCIATION
社団法人　日本補償コンサルタント協会

倫　理　綱　領

社団法人日本補償コンサルタント協会は、公共事業の有する意義並びに地域社会及び個人に及ぼす影響の重要性に鑑み、会員がその専門的知識と経験を活用して、諸権利の調整並びに補償の適正な実現に資し、もって公共事業の円滑な推進と公共の福祉の増進に寄与することが補償コンサルタントとしての使命であり、常に倫理の高揚と使命の達成に努めるものであることを宣言し、ここに会員の総意に基づいて倫理綱領を定め、会員がこれを遵守して、良心に従い誠実に職務を遂行することを誓うものである。

１．資質の向上と品位の保持

会員は、社会の進展と複雑多様化する補償業務に対処するため、常に知識技能を研鑽し、専門職業家としての資質の向上と、品位の保持に努め、社会的評価の向上を図らなければならない。

２．公正の維持

会員は、補償コンサルタント業務の公共性に鑑み、常に厳正中立の立場に立って業務を行い、公正を欠くことのないよう特段の注意を払わなければならない。

３．守秘義務

会員は、業務上知り得た秘密を他に洩らしてはならない。ただし、依頼者から許されている事項についてはこの限りでない。

４．不当競争の禁止

会員は、業務の受注にあたり、不当な競争をしてはならない。

５．相互協力

会員は、業務の遂行にあたり、必要のあるときは、会員相互間の技術提携あるいは他の専門家の協力を求めるように努めなければならない。

６．法令等の遵守、名誉保持の義務

会員は、法令、本会の定款、規則、規程その他の定めを遵守し、直接であると間接であるとを問わず、自己又は他の会員若しくは協会の名誉又は信用を傷付るような行為をしてはならない。

（第４回通常総会決議）

目　次

◆沖縄支部設立 20 周年記念行事
記念式典次第
式　辞　　沖縄支部長　伊波 盛武　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
祝　辞　　内閣府沖縄総合事務局次長
　　沖縄地区用地対策連絡会　会長　　菊池　良介　・・・・・・・・・・3
祝　辞　　沖縄県土木建築部長　当間　清勝　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
祝　辞　　(社)日本補償コンサルタント協会　会長　吉田 昭夫　・・・・・・・・6

沖縄支部設立 20 年の経過報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
感謝状受賞者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

写　真
記念式典　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
来賓挨拶　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
感謝状贈呈　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
記念講演会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

◆寄稿文
元専務理事　　舘形 博様　　(沖縄支部設立時に思いを寄せて)・・・・17
協会顧問　　山口 正久様　　(沖縄との出会いと思い)・・・・・・・・・・19
元沖縄支部長　　島袋 精次　　(支部設立 20 周年に寄せて)・・・・・・・・21
元沖縄支部長　　松川 清康　　(沖縄支部設立 20 周年に想う)・・・・・・23
前沖縄支部長　　松田 喜知　　(支部長としての思いで)・・・・・・・・・・24

◆記念講演会　「琉球王国の公共事業とその戦略」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　　講演者 琉球大学法文学部国際言語文学科 教授 高良 倉吉氏

◆祝賀会
祝賀会次第　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
アトラクション出演者名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
祝　辞　　那覇市長　翁長 雄志　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
写　真
祝賀会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
式典･祝賀会出席者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

◆沖縄支部 20 年の歩み（資料編）
年　譜　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
支部出版図書　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
沖縄支部役員等の変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

挨　　拶

（社）日本補償コンサルタント協会
沖縄支部　支部長　伊波盛武

（社）日本補償コンサルタント協会沖縄支部長の伊波でございます。本日は、公務ご多忙の折、沖縄総合事務局次長菊池良介様、沖縄県土木建築部長當間清勝様、（社）日本補償コンサルタント協会会長吉田昭夫様をはじめとする御来賓の皆様と共に（社）日本補償コンサルタント協会沖縄支部設立20周年を祝うことが出来ますことを無上の慶びとするとこです。

本年6月1日沖縄支部は設立20年を迎えることが出来ました。昭和52年に将来補償コンサルタント協会加入を念頭に損失補償基準の勉強・研究、日々の連絡調整の為6社が集まって組織したのが現在の母体となっております。その後、昭和57年に（社）日本補償コンサルタント協会九州支部沖縄県部会に加入し名実ともに協会会員となりました。平成4年6月1日、晴れて（社）日本補償コンサルタント協会沖縄支部として独り立ちいたしました。それも偏に沖縄総合事務局と協会本部のご指導の賜物と感謝しています。この場をお借りして改めて会員一同を代表して感謝申し上げます。

現在の会員数は33社であります。当初の6社、支部設立時の18社と比べても倍近く増えました。当支部は、「起業者に信頼される補償コン」を合い言葉に、会員相互の研修、各種委員会等で最新の補償理論の研究を行っています。今後も起業者の皆様の御期待に添うよう会員一同一丸となって、公共事業の効果の早期発現に向け最大の努力を致しますので、皆様方のお力添えも宜しくお願い申し上げます。

本日は、記念式典の後、特別講演として琉球大学法文学部国際言語文化学科教授の高良倉吉様に、「琉球王国の公共事業とその戦略」と題してお話をして頂きます。先生は沖縄歴史の大家で著書も多数あります。平成5年、NHK大河ドラマ「琉球の風」や最近放映されました「テンペスト」の歴史考証を手がけられました。先生のお話をお聞きになりながら琉球王国当時を連想することが出来ことと思います。

午後5時半から、当会場で20周年記念祝賀会を催します。幕開けには、当支部会員の「かじゃで風」や余興のエイサー演舞、副支部長の空手演武と見所が

沢山あります。どう皆様今日の良き日を共にお祝い下さい。

最後になりましたが、本日のご臨席の皆様の御健勝と沖縄支部の更なる発展を祈念して、主催者の挨拶といたします。

本日は誠にありがとうございました。

祝　　辞

沖縄地区用地対策連絡会会長
内閣府沖縄総合事務局次長
菊池　良介

本日、ここに社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部の設立２０周年記念式典が開催されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

本日ご列席の沖縄支部所属会員の皆様におかれましたは、これまで補償コンサルタント業務に関する調査研究や研修等の様々な活動を通じて、補償コンサルタント業務のより一層の充実・発展に多大な成果を上げてこられたことに深く敬意を表するとともに、本日ここに設立２０周年の記念すべき日を迎えられたことに、心からお喜びを申し上げます。また、平素より、沖縄振興の一翼を担う社会資本整備、とりわけその先陣を切って行われる用地補償業務の推進にご尽力頂いてこられたことに、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

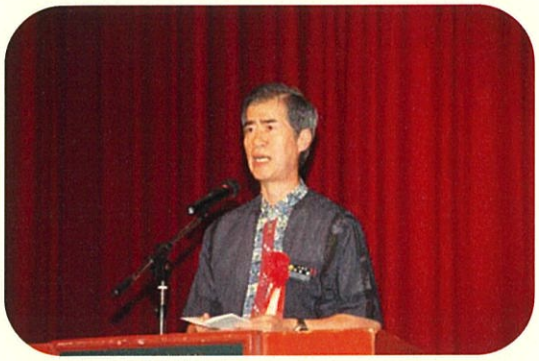
さて、皆様もご承知の通り、今般の公共事業を取り巻く環境は年々厳しさを増しており、国土交通省所管の公共事業予算で見れば、平成１３年度は２７兆円を超えておりましたが、以降縮減が続き平成２４年度は約１１兆円まで減少しております。こうした極めて厳しい財政状況の下、沖縄振興予算につきましては、沖縄県の要望に最大限応え、前年度より６３６億円増の２９３７億円が確保されました。また、３月３０日に成立しました改正沖縄振興特別措置法におきましては、振興計画の策定主体を沖縄県に変更し、一括交付金の交付をおこなうなど、沖縄県の主体性をより尊重するとともに、財政、税再面を中心とした国の支援措置を拡充する内容となっています。このような状況の中、皆様の業界に直接関係して参ります公共事業に関しましては、今般整備までの時間が長期化する寄稿にあり、整備効果を早期に発現することが強く求められています。こうした声に応えるべく国土交通省では、平成２０年３月に策定された「国土交通省公共事業コスト構造改革改善プログラム」において、用地取得業務の円滑化を図るという目的で「用地取得マネジメント」と「用地取得業務の効率化のための民間活力」導入を謳っています。用地取得マネージメントについては、事業の計画段階から用地取得上のリスクの把握を行い用地取得の工程管理計画を策定し適切な用地取得体制を構築することにより、用地取得期間の短縮化を図るものであります。民間活力の活用については。従来の用地調査業務は

もとより用地取得に関する知識と経験が豊富な補償コンサルタント等の専門家を更に幅広く活用することにより、用地交渉の支援や土地収用法の活用等用地取得の円滑化・迅速化を図ることとしています。次に、昨年の東日本大震災を契機に防災意識が高まる中、沖縄総合事務局におきましては、道路等当局施設が被災した場合に備え、復旧作業等に必要な用地調査等が円滑に進むよう、社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部と「災害持における沖縄総合事務局開発建設部所管施設被災に伴い実施する用地調査等業務に関する協定書」を締結いたしました。これにより、万が一震災が発生した場合においても当局が担う道路施設等の復旧が迅速におこなわれるものと確信しております。何れに致しましても、公共事業の整備効果の早期発現に大きく影響する用地取得業務につきましては、補償コンサルタント業界の皆様の力が必要不可欠であり、例えさせていただくなら、起業者と皆様は、まさに車の両輪の関係であります。

今後とも社会資本の整備ひては沖縄県の発展のため、これまで培って来られた沖縄支部の皆様の技術力を存分に発揮して頂けるようお願い申し上げます。

おわりに、社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部及び会員の皆様のますますのご発展を祈念致しましてお祝いの言葉とさせて頂きます。

祝　　辞



（代読される町田土木企画統括監）

沖縄県土木建築部長
当間　清勝

本日、社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部の設立２０周年記念式典が、このように盛大に挙行されますこと
を心からお祝い申し上げます。

貴支部が設立された平成４年は、いわゆるバブル経済が崩壊し、我が国経済が俗に「失われた２０年」などと称される長い景気低迷に入った時代でした。その後のリーマンショックを始めとする世界同時不況や「コンクリートから人へ」を背景に公共投資額が減少するなど厳しい経営環が続く中、本日、貴支部がめでたく設立２０周年という晴れやかな日を迎えられたことは、ひとえに歴代支部長を始め会員の皆様のご尽力の賜でありこれまでのご労苦とご功績に対し深く敬意を表するものであります。

さて、沖縄県は、一昨年、将来の沖縄のあるべき姿、ありたい姿を示した沖縄２１世紀ビジョンを策定しましたが、日本国に復帰して４０周年という節目の年に当たる今年、その将来像の実現に向けた施策網羅した「沖縄２１世紀ビジョン基本計画」を策定しました。今後、この基本計画に基づき「強くしなやかな自立型経済の構築」と「沖縄らしい優しい社会の構築」を目指して、空港、港湾、道路など、産業発展に必要な基盤整備を戦略的に推進していくこととしております。日本補償コンサルタント協会におかれましては、これまでも用地補償業務等を通じ、公共事業の推進に大きく貢献されてまいりましたが、今後とも、皆様の豊富な知見と専門的技術が求められる機会は益々多くなるものと考えており、支部設立２０周年を契機に一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

おわりに、社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部の限りない御発展と御臨席の皆様の御健勝・御活躍を祈念申し上げ、お祝いのあいさつといたします。

祝　　辞

社団法人日本補償コンサルタント協会

会長　吉田昭夫

日本補償コンサルタント協会沖縄支部の２０周年記念式典が、このように盛大に開催されましたことをお喜び申し上げます。

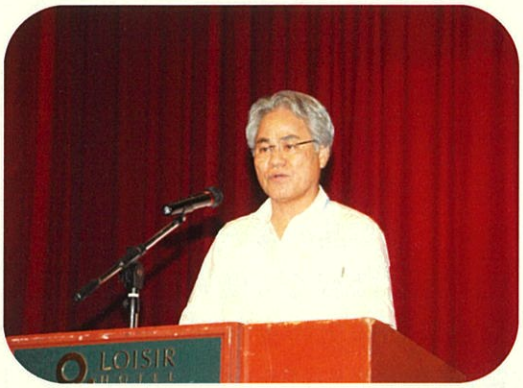
また、本日は、内閣府沖縄総合事務局次長　菊池良介様、沖縄県土木建築部長当間清勝様をはじめ多くの起業者の皆様にもご参加をいただき、心から御礼申し上げます。当協会におきましては、補償業務管理士研修及び検定試験など例年実施している事業はもとより、東日本大震災に伴う被災地等の一日も早い復旧・復興等を願い、現在、国、地方公共団体、公益事業者などが実施している東日本大震災関連業務にも組織を挙げて支援等を行っているところでございます。さて、沖縄支部は、昭和５７年４月１日に社団法人日本補償コンサルタント協会九州支部沖縄県部会として発足し、平成４年６月１日に全国１０番目の支部として設立され、会員３３社を擁する組織として、現在に至っております。この間、沖縄支部は、沖縄地区用地対策連絡会発刊の「損失補償標準書」を補完する「損失補償算定要領」の作成や、実務者研修会、起業者との意見交換会、講演会等の活動を通して、起業者の皆様からの更なる信頼を得るために会員相互が努力・研鑽に努めているところでございます。

ところで、補償コンサルタント業務の市場環境は、既に暫く前から非常に厳しい状況が続いておりますが、こうした中で、当協会におきましては、協会を挙げて業務領域の拡大に向けた取組をおこなっているところでございます。ご承知の通り、平成２０年に協会の長年の課題であった総合補償士の制度を創設し、同年１０月からは補償コンサルタント登録規程にも新たに総合補償部門が追加されました。従来の個別業務調査・算定に「公共用地取得計画の立案」、その「工程管理」、「補償相談」さらには「公共用地交渉」等が加わり、大半の用地取得業務を補償コンサルタントが担えるようになったところでございます。協会におきましては、公共用地交渉を始めとする総合補償部門は、高度な奥の

深い補償コンサルタントが活躍できる新たな業務領域として期待しているところであり、各起業者の皆様にこれら業務の発注増加等の業務領域の拡大について、お願いをしてきているところでございます。各起業者の皆様におかれましては、是非とも、こうした取り組みをご理解いただき、業務領域の拡大にご協力をお願い申し上げます。協会では、時代が求める企業の社会的責任を果たして、起業者の皆様の信頼と期待に答えて行くことが、良きパートナーとしての補償コンサルタントの使命であると考え、補償業務に従事する者の資質の向上を図り、成果品の質の確保等に努めているところでございます。また、平成２２年７月には若くて優秀な補償業務従事者を育成することなどを目的として、補償業務管理士の受験要件から「学歴による補償業務従事年数」を撤廃し、同試験の門戸を広げたところでございます。こうした協会の活動等をご賢察いただき、引き続き、沖縄支部を始めとする協会と協会会員に対するご理解・ご支援をお願い申し上げます。　申し遅れましたが、沖縄支部を始め、協会の今日がありますのも、本日ご参加いただきました起業者の皆様方の日頃のご指導の賜でございます。この場をお借りして改めて御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬお力添えをお願いする次第でございます。

終わりに、沖縄支部が引き続き補償業務の推進に寄与していくこと、また、本日、沖縄支部２０周年記念式典にご出席いただいた起業者の皆様方並びに沖縄支部及び会員の皆様方の一層のご活躍・ご発展を祈念申し上げまして挨拶とさせていただきます。

沖縄支部設立２０年の経過報告



本日、沖縄支部の２０周年記念式典にあたり、沖縄支部の２０年の歩みを皆様にご報告するとともに、支部会員相互の連携で明日の沖縄支部の更なる発展を皆様のお力添えも頂きながら築いて行く所存でございますので、今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

総務委員長　小濱　定和

さて、日本補償コンサルタント協会沖縄支部は、平成２４年６月１日で満２０才を迎えることができました。思い返せば、昭和５２年４月１日、国直轄の建物調査業務等を手がけていた６社が集まり、暗中模索、手探りの状態で補償基準の勉強等をするために組織したのが、現在の沖縄支部の母体となっております。その後、当時の協会本部・舘形専務、沖縄総合事務局用地課等のご指導のもと昭和５７年４月１日に社団法人日本補償コンサルタント協会九州支部沖縄県部会として、晴れて（社）日本補償コンサルタント協会に参画できました。九州支部の会員の皆様には沖縄支部設立までの１０年間多方面からのご指導誠にありがとうございました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

その後、平成４年５月１５日沖縄支部設置準備総会、同年５月３１日九州支部沖縄県部会解散を経て、同年６月１日、社団法人日本補償コンサルタント協会の１０番目の支部として沖縄支部が設立されました。沖縄支部設立にご尽力されましたのは、当時の協会本部の相川会長、舘形専務でありました、舘形様には、今日の沖縄支部２０年の晴れ姿をご披露したく、ご案内申し上げましたが、体調の関係で今回は、来沖が叶いませんでしたが、御祝電を頂いております。

支部設立当時の会員数は１８社で発足し、翌平成５年に２２社、平成６年２４社、平成８年２５社、平成９年にほぼ、現在の会員数と同じ３３社になりました。

その中で、毎月の支部役員会開催、各種業務委員会の開催、補償業務研修会開催、起業者との意見交換会等を行い、補償専門家集団として用地取得に関する諸法規の研修、損失補償基準等の知識の取得に務めてまいりました。又起業者に信頼される補償コンサルタントを目指して、起業者への陳情活動等

の実施、会報「うるま」の発刊、沖縄支部会員名簿の発刊等、を行い。会員相互が日々研鑽を重ね用地補償の分野で沖縄支部は着実な地位を占めるに至っておりますが、まだ、一部に、補償コンサルタントの有用性の認識の薄い起業者もありますが、将来的には公共事業の円滑な推進を図る当支部の存在が益々大きくなるものと考えています。
最後に、今後とも社団法人日本補償コンサルタント協会の倫理綱領「公共事業の有する意義並びに地域社会及び個人に及ぼす影響の重要性に鑑み、会員がその専門的知識と経験を活用して、諸権利の調整並びに補償の適正な実現に資し、もって公共事業の円滑な推進と公共の福祉の増進に寄与することが補償コンサルタントとしての使命であり、常に倫理の高揚と使命の達成に務め」の精神を忘れることなく沖縄支部会員一同、一丸となって邁進することをお誓いして、沖縄支部２０年の経過報告といたします。
本日は、誠にありがとうございました

沖縄支部設立２０周年記念感謝状受賞者

受賞者	役　職	所属会員名
舘形　博	元協会専務理事	
山口　正久	協会顧問	
島袋　精次	元沖縄支部長	（株）沖縄用地測量設計
松川　清康	元沖縄支部長	（株）アジア測量設計
松田　喜知	前沖縄支部長	（株）松田・伸設計
柴田　耕治	元事務局長	（株）沖縄総研
新垣　健栄	前事務局長	（株）都市建築設計

式典風景

式典　左から菊池次長、町田統括監、吉田会長

左→川満委員、小濱委員、桃原副支部長、伊波支部長

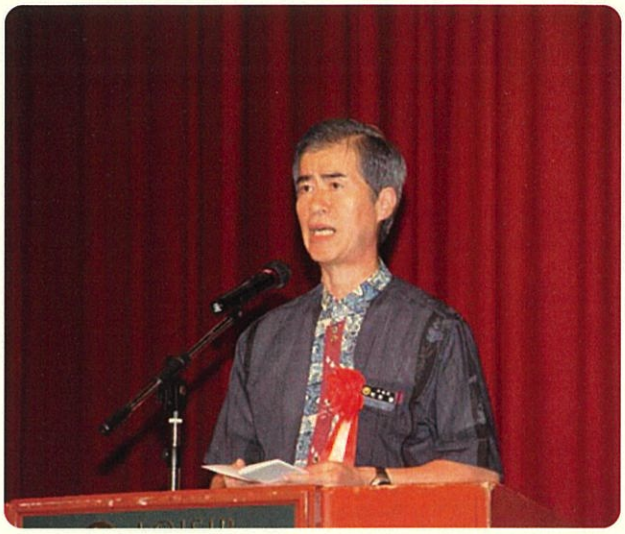
式典風景

式典風景

式典風景

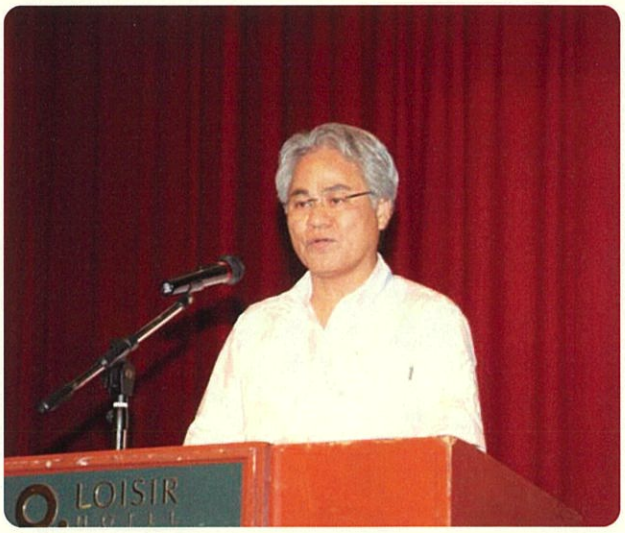
式典・主催者挨拶　伊波支部長

来賓挨拶　菊池沖縄総合事務局次長



来賓挨拶　町田土木企画統括監

来賓挨拶　　吉田会長



20年経過報告　小濱総務委員長

会場風景

司会：石底マキさん

感謝状・贈呈式

感謝状贈呈　　山口正久　前専務理事

感謝状贈呈　島袋精次　元支部長

感謝状贈呈　松川清康　元支部長

感謝状贈呈　松田喜知　前支部長

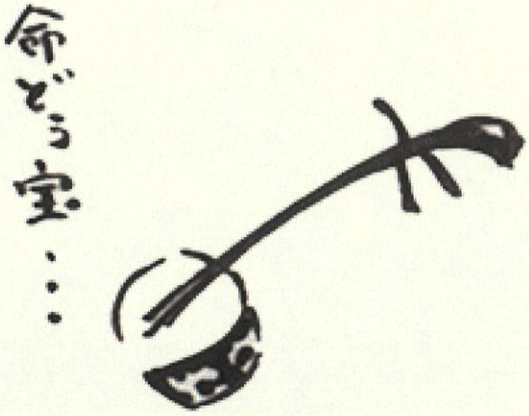
感謝状受贈者[山口氏、島袋氏、松川氏、松田氏

柴田耕治　元事務局長

感謝状贈呈　新垣健栄　前事務局長

閉式宣言　川満補償業務委員長

記念講演：高良倉吉琉球大学教授



感謝状・記念品

式典の引き出物

壺屋焼き
育陶園制作のカップ

沖縄支部２０周年を迎えて

寄稿者

元協会専務理事	舘形　　博様
協会顧問	山口　正久様
元沖縄支部長	島袋　精次
元沖縄支部長	松川　清康
前沖縄支部長	松田　喜知

沖縄支部設立時に思いを寄せて

元協会専務理事

舘形　博

沖縄支部から支部設立時の経緯等について書くようにとの依頼があり、筆を取ることと致しました。先ずは、沖縄支部が20周年を迎えられ、心からお慶び申し上げる次第です。沖縄支部設立以来今日までの成果は、歴代の支部長をはじめ、支部会員の結束した努力の結果であり、その活動に敬意と感謝の気持ちで一杯です。

私が協会にお世話になったのは、平成２年からですが、１年後、荒井専務理事から専務職を引継ぐことになり、専務の引継ぎ等を受けました。その際私は、沖縄の復帰した昭和４７年５月から昭和４９年（その頃は、補償コンサルタント組織は未だありませんでした）に亘り、沖縄総合事務局の初代用地課長として勤務したこともあり、道路、港湾等の復帰事業を進めて行く上で、用地補償問題を円滑に処理することが極めて重要な課題だと痛感していました。このような事もあり、沖縄に関心の目を向けた事務引継ぎということになったのは勿論でした。その結果補償コンサルタントの組織として、沖縄に支部組織の無いことを知り、北海道から九州に至るまで、地方支部局組織があるのに、沖縄に無いのは、何故？という疑問を持ちました。沖縄には、沖縄開発庁の地方支部局である沖縄総合事務局があり、沖縄総合事務局は、用地補償業務の処理に全力を投じていたからです。このような事から補償コンサルタントとしても公共事業施行者との連携を密にする必要があると考えていました。さらに、沖縄の業者は、九州支部の傘下にあったため、本部役員会の委員や、理事に選出されていなかったのも事実でした。このような時期に、初代支部長を勤められた島袋精次氏及び亡くなられてしまいましたが、我那覇生順氏が本部にお見えになり、沖縄支部を設立することにより、沖縄総合事務局を始め、沖縄県その他の公共事業施行者と補償コンサルタントの関係を用地補償業務の面を通じ、連携を密にしたいという意向が伝えられました。

前述したような理由もあり、意向を受け早速検討に入りました。検討課題は①定款の改正（支部組織を設立するため、理事の数を増やすこと）、②沖縄支部を構成する予定の会員数と支部交付金とのバランス、③九州支部との調整、④事業計画等、が主なものでした。特に定款の改正は、執行機関である理事を増やす事ですから、定款改正につて認可権を有する当時の建設省の審査の厳しかった事を覚えています。これらの改正案等について、協会の役員会、理事会、総

会に説明をし、議決を経て行われたことは勿論です。

このような経過を辿って、平成４年６月 １ 日に沖縄支部の設立という事に成った訳ですが、沖縄総合事務局から支部の事務局長を送られる等、沖縄支部の活躍と責任に期待する声も聞かれました。設立以降支部会員も増え、期待通りの職責を果たされ、今日２０周年を迎えられた訳で、これからも今以上の活躍を期待して止みません。

最後になりましたが、設立 20 周年に当たり、沖縄支部から感謝状を頂きました。支部長をはじめ、会員の皆様に心から感謝しております。

沖縄との出会いと想い

協会顧問　山口正久

仕事を通じて沖縄との縁は、昨年沖縄復帰（1972 年 5 月 15 日）40 年を迎えましたが、私は当時旧建設省の住宅政策課の鑑定係に在職し「不動産の鑑定評価に関する法律」の運用等の事務を執っていました。復帰に際して、この法律が施行された時と同様に、3 年に限り、不動産鑑定士試験の一般試験とは別に特別試験を実施し、その間鑑定業の登録も特別な措置を講ずる内容の法律改正があったと記憶しています。また、復帰前後には本土の業者が土地の買い占めで地価が著しく高騰している等の国会質問で、主として那覇市街の地価マップ作りをしました。その頃、約束時間にルーズであるという「沖縄時間」という言葉を知りました。その後、協会に就職した訳ですが、沖縄支部及び会員の皆様との関係では心に残る２つの出来事があります。

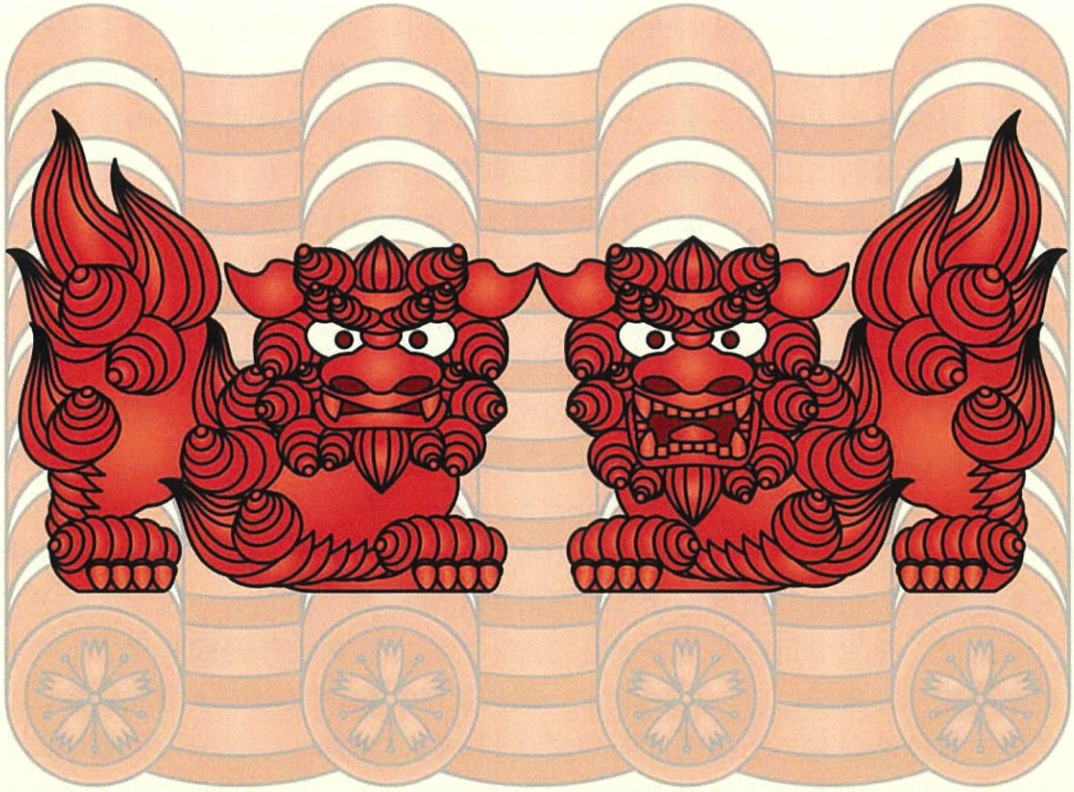
１つは、２００８年（平成２０年）１１月に本部の３０周年記念行事を開催する時に、沖縄支部を除く他の支部もこの期に前後して３０周年記念をそれぞれ開催しました。沖縄支部は当初九州支部に所属していた関係で、その機会がなかったこともあり、全会員の士気を高めるためにも是非何らかの形で本部行事に参加してもらいたいと計画作りをしていました。特に、この記念行事は会員のための会員によるをモットーとした手作りを主唱していましたので、その一案として会員数名による沖縄色の濃い伝統文化を演じてもらいたい旨、事務局にお願いしました。ところが、予想を超えて支部会員やその家族による三線と舞、桃原副支部長の沖縄空手を演じてもらい、当日は大変盛り上がりました。後日談ですが、会員の一人は感激して涙が止まらなかったと感想を漏らしてくれました。支部の団結力と実行力に心を打たれました。

他の１つは、沖縄支部の２０周年記念式典の前日、沖縄ジャズを聴く前に、伊波支部長の会社を訪れ支部長と談話した時のことです。事業主としての人材発掘、ポテンシャルの発見、育成等の今昔、そして将来に向けての伊波ドリームは何か？と話を向けると、沖縄の真の復興のための事業、ひいては支部会員にとって長期かつ肥沃な市場となる事業計画策定に取り組んでいるとのことでした。それは、今まで用地業務を通じて培ってきた技術力や経験を礎として将来の事業展開への実現にむけて法律家、都市工学、建築家等の学識経験者による研究会に可能性を秘めた夜明け前のプロジェクトに参画し、自分の在職中に実現できなければ、次の世代に引き継ぐとのことでした。是非。サンライズプロジェクトとなることを祈念するとともに、いたく感動を受けました。

私見ですが、本来用地補償業務、特に用地交渉は地域密着型業種です。経済学者、医師、測量家の顔を持つ古典派経済学と統計学の始祖と謂われたイギリス人ウイリアム・ペティ（1623.5.27～1687.2.16）は「富の父は労働であって、自然は富の母である」と言っています。これを土地に置き換えると、生存に必須な土地の特性と人が土地を有用となるように働きかける人為的要素との複合で土地の価値が決まるということです。よく土地のことは土地に聞けと言いますが、その土地のことを熟知しているのは地域の人々です。また、専門家には2つの役割があります。専門性を徹底的に掘り下げることと、それを一般人に解り易く伝えることです。後者の適者は地域の人々です。

特記すべきは、沖縄県民は人と人との繋がりが深く、収入が少ない若者が生きていけるのはスポンジのような吸収力の支えあい社会だからだそうです。ここ10年の会員数の推移を見ても変動はなく、支部活動も全員参加型です。

会員それぞれが、相互間の目的を共有する土壌などの優位性を生かし、新たな輝かしい歴史が開かれることを切に願っています。



支部設立20周年に寄せて

元沖縄支部長（初代）

（株）沖縄用地測量設計会長

島　袋　精　次

平成２４年は、沖縄の本土復帰40周年の節目を迎えた年であり、沖縄支部設立20 周年の年にあたります。人間でいえば、成人して公民権が与えられ心身が健やかに発育、一人前になったことであります。

過去20年間を振り返ってみますと、任意団体の沖縄県部会として会員６社で発足し、初代会長下地恵昭氏（有限会社　南西不動産鑑定所）のご尽力と協会本部及び九州支部のご指導、ご助言により昭和57年４月１日からは九州支部の一員として全国の会員の仲間入りをすることができました。会員は、平成 4 年には １８社になり二代会長仲本政雄氏（(株) 国土鑑定センターのもとに一致団結して補償コンサルタント業務に携わってきました。

沖縄支部設立あたっては幾多の難問がありました。まず会員数が少ないこと、そして組織が脆弱であり支部としての体制が整っていないのではないかと謂う事で検討されてきましたが、九州支部加入 10 年目であり、諸般の情勢からこの記念すべき年に九州支部のご同意及び関係各位のご理解と協会本部のご指導により、沖縄支部が平成４年６月１日に全国10番目の支部として設立されました。

１．沖縄は離島県につき、他県とは地理的に独立していて経済圏も他の 9 ブロック（支部）のいずれにも包含されない。

２．沖縄県の会員は少ない（18 社）ので当分の間九州支部に所属した方が望ましいという協会本部の指導助言に従って考慮してきたが、支部運営に自信が持てた。

３．各地区用地対策連絡会には各支部が対応しているが、沖縄地区用地対策連絡会においても独自の損失補償基準を作成して活用しているが支部が設けられていない。沖縄支部の設置により、各地区用地対策連絡会に対して各支部という組織上の制度が確立する。

４．沖縄県の補償コンサルタントは、支部の設置により、組織として社会的信頼が高まり、会員の資質の向上、業務の進捗改善及び受託体制の強化が図られ沖縄における公共用地の円滑な取得に寄与することが出来る。

以上のとおりでありました。

沖縄支部設立後20年が経ちました。今日までの20年に亘る支部としての役割、会員の資質の向上、公共用地取得業務における専門家集団としての自覚と実績は貴重なものであります。沖縄の振興等はまだ道半ばであります。軍用地の返還跡地の利用活用計画も話題になりますが、先が見透せない現状でしょう。戦後半世紀以上に亘って接収され提供してきた軍用地の返還後の跡地利用地は沖縄振興開発発展の大きな課題であると思います。又、提供施設の返還により収入を絶たれた地主への補償も生活再建の観点から考慮されるべきではないかと思います。沖縄においては土地についての戦後処理は未だ終わっておりません。公共用地として利用しているにも係わらず用地の取得ができない所有者不明土地しかり、字有地、門中墓地等の共有財産の処理等もあります。

支部設立して20年経ちました、積み重ねてきた実績と逞しく育った人材を財産として沖縄における公共用地取得における専門家集団として今後益々の活躍が期待されております。

最後に支部設立時の副支部長の故我那覇生順氏（(株）環境エンジニア）のご功績を称えるとともに沖縄の良き理解者の舘形　博（元協会本部専務理事）に感謝いたします。

沖縄支部設立２０周年に想う

元沖縄支部長（二代目）

（株）アジア測量設計会長

松　川　清　康

沖縄支部は、1992 年 6 月 1 日に設置して 20 年目を迎えますが、沖縄県が日本復帰 40 周年という節目の年でもあります。

沖縄支部の前身である県部会から支部設置するまでは、紆余曲折を経ながら協会本部や島袋精次初代支部長はじめ多くの会員の尽力により全国 10 番目の支部として生まれ変わりました。

沖縄支部は、2002 年 8 月万国津梁館において 10 周年記念式典、2012 年 7 月ロワジールホテルにおいて 70 名の招待客を迎えて沖縄支部設立 20 周年記念式典も盛大に行われました。

沖縄支部が 20 才の成年で 1 人立ちできたのも誕生以来今日まで、暖かいご指導ご支援を賜りました沖縄総合事務局、沖縄県、各市町村はじめ、補償業務に関係する皆様のおかげであり感謝を申し上げます。

協会本部と支部との組織の折り合いは、他の協会（全測連のような連合会）では、各県協会あっての協会本部に対し、我々の日本補償コンサルタント協会は、本部あっての支部組織なので本部の事業運営の動行が直接支部に伝わってきて、活動運営を展開することもよくある。

私は平成６年度から平成１５年度まで副支部長と本部理事をし、平成１６年度から１９年度まで支部長と本部理事をしていましたので協会本部と支部の役割を理解しながら進めてきたつもりです。

協会本部では、社会的地位の向上確保と経営基盤の確立を図るための事業を目指して数多くの取組を行っていました。例えば、事業として、用地体制ビジョンの取りまとめ・業務受託歩掛の作成・業務領域拡大の調査研究・補償業務管理士の地位向上・補償業務管理士商標登録・土地収用実務研修の実施・総合補償実務研修の開始等が上げられます。

沖縄支部活動の主な事業は、補償業務研修会・起業者との意見交換・起業者への陳情活動を毎年実施し、支部会員の資質の向上や経営基盤の確立を図るための事業を今も継続しています、又、成果の品質を確保するために支部内で『用地調査等成果品チェック表』を作成した時期もありました。沖縄支部は若い会員が多く元気で活力があるので、効率的かつ専門的な補償コンサルタント業務を推進することを期待しています。

終わりに日本補償コンサルタント協会沖縄支部の更なる発展並びに会員各位のご健勝を心より祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

支部長としての思いで

前沖縄支部長（三代目）

（株）松田・伸設計社長

松　田　喜　知

社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部が設立されて20周年を迎えました。この節目は誠に感慨深いものがあり、沖縄支部がここまで発展してこられたのも会員皆さまはもとより、本部や各支部、起業者のご支援のお陰であります。心よりお喜び申し上げます。

沖縄支部は、昭和52年に県内コンサルタント6社で発足し、昭和57年に九州支部の沖縄県部会として協会に参画しました。そして初代県部会長に下地恵昭氏（故人）が就任、二代目が仲本政雄氏、三代目に島袋精次氏がそれぞれ職責を全うしました。当時の九州支部長は原田　昇氏（故人）でしたが、業務を兼ねて頻繁に沖縄を訪問され私どもはいろいろとご指導ご助言を頂きました。原田氏は、明るく愉快な方でしたので個人的にもお付き合いをさせていただき、那覇市内のスナックで泡盛を酌み交わしながら懇談した記憶が印象深く残っています。

平成4年5月15日、たしか那覇料亭で沖縄支部の設立準備会が開かれ、舘形専務から細かい説明を受けながら役員人事を決定し、6月1日に支部が設置されたのです。当時会員は18社でスタートし、徐々に会員も増え現在は33社に達しています。支部の運営を左右する会費規定では、正会員の固定会費が年額12万円、売上高の0.5%から1%を徴収する売上高会費を設定したのが特徴的だったと想います。ところが、この売り上げ会費には会員からも不満の声が上がり、独占禁止法にも抵触する恐れがあるとして撤回されました。

支部設置後は、島袋支部長と我那覇生順副支部長（故人）らの意気込みは大変なものでした。特に我那覇氏は大手補償コンサル会社に勤務した経験があり、持ち前の度胸で本部にも積極的に発言するなど頼もしい限りでしたが、病に倒れ若くしてこの世を去り残念の極みです。県副部会長としても大きな功績を残しています。とりわけ、沖縄支部設置にあたっては果敢に行動し、支部組織の基盤を築いたことは誰もが認めるところです。

最後に、私自身も島袋支部長と松川支部長が積み上げた業績を汚すことなく、先輩諸氏が敷いたルールの上を脱線せずにまっすぐに走り続けることが出来ました。改めて役員や会員の皆さまに感謝申し上げます。今年の干支は巳年です。

蛇が脱皮して成長するように我が沖縄支部の心機一転、一回りも二回りも大きく成長、発展されますよう祈念申し上げます。

九州支部役員との雪山踏査

記念講演

演　　題
「琉球王国の公共事業とその戦略」

講演者　琉球大学法文学部国際言語文化学科
教授　　高良倉吉氏

社団法人　日本補償コンサルタント協会沖縄渋創立20周年記念式典

日時：平成24年７月12日（木）

場所：ロワジールホテル３階「天妃の間」

○司会（石底）：ご紹介いたします。

高良倉吉氏は、沖縄県島尻郡伊是名村ご出身で、愛知教育大学教育学部ご卒業、文学博士でいらっしゃいます。

沖縄史料編集所専門員、沖縄県立博物館主査、浦添市図書館長を経て1994年より琉球大学文学部国際言語文化学科教授となられ、首里城復元の委員も務められます。そしてＮＨＫ大河ドラマ「琉球の風」の監修に携わり、最近ではＮＨＫ放送の「テンペスト」の歴史監修も手掛けられました。また著書も多数出版され、一部をご紹介しますと、1980年ご出版の「琉球の時代－大いなる歴史像を求めて」「琉球王国の構造」「琉球王国史の課題」「琉球王国」「『沖縄』批判序説」、そして98年「アジアのなかの琉球王国」など、琉球の歴史を学ぶのに欠かせない著書が数多くございますこと、既にお読みになったという方、皆様既にご承知のことと存じます。

さて本日は、琉球王国の公共事業とその戦略と題しまして、ご講演をいただきます。沖縄県の前身である琉球王国、ウチナーンチュの先人たちがどのような国際情勢で、どのような政治をしていたか、大変興味深い演題となっております。

それでは、高良倉吉先生をお呼びしたいと存じます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

皆様、拍手でお迎えくださいませ。

記　念　講　演

『琉球王国の公共事業とその戦略』

琉球大学法文学部国際言語文化学科

教授　高 良　倉 吉 氏

只今ご紹介にあずかりました琉球大学の高良でございます。

今、司会の石底様から紹介がありましたように、沖縄生まれの沖縄育ちでして、いろんな理由があるんですけれども、自分なりに郷土の沖縄の先人たちが歩んだ道というものを勉強して、そしてその成果をできるだけ多くの人にお伝えするというのが私の仕事であります。今は地元の琉球大学で沖縄の歴史、琉球史の教授をし

ていまして、若い学生たちと一緒に勉強をしております。地元の若者たちは当然ですけれども、最近は、どういう訳か全国各地から若い人が勉強に来ます。現在は、ドイツとポーランドからも留学生がいまして大変賑やかにみんなで沖縄の歴史を勉強するという雰囲気が出来上がっております。

その郷土の歴史を勉強してその成果をお伝えするという事に関連しまして、様々な事をやっています。司会の方から紹介がありましたように、首里城の復元にずっと取り組んできました。その時代考証の責任者の様なことをやっております。首里城は、中心部分の復元が完成したのがちょうど20年前でありまして、一般公開されてから20年経ったんですけど、いまだ復元作業は継続しております。現在の計画では、５年後には一件落着させようじゃないかというので、みんなで一緒になって頑張っているという状況です。

それからもう一つは、後で触れることになると思いますけれども、沖縄の先人たちは小さな島に閉じこもって歴史や文化を創っただけではなく、中国をはじめ東南アジアとか広い地域と交流をしました。ちっぽけな島々ですけれども歴史的には非常に大きな範囲にまたがって活動したという伝統もあります。その先人たちが展開したアジアの各地を訪ねて、そこで地元の先生方に教えて頂きながら、沖縄の歴史をアジア的な広がりの中で考えて行くという事も私に課せられた勉強テーマでありました。

きょうは、日本補償コンサルタント協会沖縄支部様が、ちょうど首里城と同じですけれども創立20周年を迎えられたというので、沖縄の歴史の中から土木や公共事業に関連する話をしてほしいというお誘いがありました。現在の公共事業、土木というものと若干ニュアンスが違うのかもしれないので全く自信はなく、ちょっと羊頭狗肉になるかもしれません。私が勉強した琉球王国時代は、先人たちがアジアと交流し、琉球王国という一つの国を経営していたわけで、そこで皆様のお仕事に少し関連する材料あるいは話題を提供できたらという積もりで、このスピーチをお引き受けしたということであります。

お手元に、非常に雑駁な資料ですけれども、私の今日の話のメニューのようなものが書いてありまして、二つほど資料を準備いたしました。

一つは、沖縄の歴史。今日は他府県からお見えになっている方々が多いようですけれども、なかなか沖縄の歴史は馴染みが薄いと思いますので、時代の流れが判るような資料を作りました。もう一つは、アジアと交流した当時の状況が判る地図を用意しました。この二つの資料を使いながら、私の話を聞いて頂きたいと思います。そして10分ほど早目に私のお喋りを切り上げて、皆さまからご質問がありましたら、私のわかる範囲内でお答えしたいというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず沖縄の歴史の流れをちょっとだけ説明いたします。一般の日本の歴史と随分違っていまして、歴史的推移という資料にありますが結構複雑なんです。一言で説

明しようと思ってもなかなかうまく説明できないくらいに複雑です。簡単に言いますと、ここに書きましたように、古い時代に縄文文化であるとか、ようするに日本列島とかなり共通した文化というものからスタートしているんです。沖縄の方言は今では本土の方々には全く通じないと思いますが、しかし古い日本語を起源に持つ言葉です。そういう点で本土と沖縄は始発駅は一緒だと私はいつも言います。そこから出発しまして、沖縄の島々は次第に個性的になっていきます。その個性的になった象徴が、私が勉強しています琉球王国の時代、約500年です。この資料に書いてありますけれども、首里城に王様がいて島々を統治するという訳です。そして中国をはじめとするアジアと活発な交流をしたという訳です。

その交流状況が、３枚目の地図です。当時の首里城に君臨した王たちの時代ですけれども、その時代にこのロワジールホテルの隣にある那覇港という港から、船がアジア各地に頻繁に出かけた時代がありました。そこに書きましたように、北の日本本土は当然ですけれども、対馬海峡を越えて朝鮮半島に頻繁に通っていました。それから東シナ海という海を越えて、今話題になっている尖閣列島の側を行ったり来たりしながら中国に頻繁に出入りするということです。

その琉球の船が盛んに出入りして錨をおろした場所が、福州あるいは泉州という国際貿易港でありました。私は多分20回ぐらい福州に調査に行っていますけれども、今でも関係する場所が残っています。琉球の人間は琉球館というところに寝泊まりしました。そこは琉球にとってビジネスセンターのような役割を果たしていました。そこを拠点にしまして、首里城の王の名代たちが、中国国内を旅して北京の皇帝陛下に挨拶に行く。福州から北京までの直線距離は大体3,000kmほどありますけれども、そこを頻繁に行ったり来たりして皇帝陛下に挨拶をした。そして福州、泉州を拠点にした様々な活動を展開していた。この活動の中から中国文明というものをかなり吸収して、それを琉球の風土に合わせて活用するという事が行われておりました。福州の琉球館という施設は残っていませんが、その跡地は現在でも確認できます。

琉球が交流したのは、中国や日本など東アジアの地域だけではありません。南のほうにある南シナ海という大きな海を取り囲むように横たわっている東南アジアの各地。この地図には、当時の歴史的な名称で書いてありますが、現在の国名でいきますとフィリピンから始まって、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアという国々に琉球の船が盛んに行き来するという状況だったわけです。

私の仕事の一つは、その地図に描かれた地域に出かけて行って、実際に琉球サイドの資料と向こう側の資料、あるいは博物館にある遺物とを突き合わせながら当時の実態を探って行くというものです。この40年近く、その地図に描かれた地域を旅しましたけれども、行くたびに感じるのは、こんなに遠いところにまで我々の先祖たちは来たのか、という実感です。

例えば、インドネシアにパレンバンという場所がありまして、そこにも何度か行きましたが、赤道を越えた南にあるのですよね。しかも、風の力を使ってそこまで

行ったわけです。まさにアジア狭しと、琉球の人間たちが活動した時代がありました。この時代が、琉球王国の大交易時代なのです。

この時代に様々な文化をアジアの各地から学び、それが沖縄の風土の中で沖縄の人たちのライフスタイルというか価値観でアレンジされて、そして現在に伝わっているものが沢山あります。

その代表格が泡盛というお酒です。南中国から東南アジアの米作地帯で米を原料に作られる蒸留酒(スピリッツ)の製造技術を学んで、沖縄の風土の中で磨かれたのがこの泡盛という酒であります。それから沖縄の伝統音楽を演奏する場面に欠かせないサンシン(三味線)という楽器も、この交流の中で中国から入ってきた楽器です。沖縄の音楽に合うようにアレンジされて、サンシンができ上がったということです。その他にも、色々な文化交流がありました。そういうアジアと交流した時代、それが琉球王国の時代でありました。

中国や東南アジアと活発に交流した時代から、やがて1609年という年に大きな事件が起こります。関ヶ原の合戦が1600年ですので、その９年後ということになりますが、徳川家康の許可をもらって薩摩藩（今の鹿児島県)の軍隊が琉球に侵攻しました。3,000の軍が琉球に攻めてくるという沖縄の歴史の中で非常に大きな事件が起こってしまうのです。沖縄の人は誤解している所があるのですが、当時琉球にも軍隊がありました。2,000人前後の軍をもっていまして、かなりの武器で武装していました。しかし、当時の薩摩軍は、日本最強の軍隊でありました。力の差は歴然としていました。当時の首里城の王様は尚寧（しょうねい）という方だったのですが、首里城に立て籠もって徹底抗戦するか、あるいはギブアップして城を明け渡すか、どちらかにしようかと悩むわけです。最終的に尚寧王は、城を明け渡す決断をします。その理由は、徹底抗戦すると琉球の人民に多数の犠牲者が出る、犠牲を最小限に食い止める為には負けを認めるしかない、という大変辛い決断を選択して首里城を明け渡します。

その事件をきっかけに、近世江戸時代の中に琉球も組み込まれて行くという訳です。そして、それ以前から続いていた中国との関係をキープしながら、薩摩藩やその背後に控えている徳川幕府、絶大な力をもった将軍との関係を上手く取りながら、琉球の新しい時代を創って行くという大変苦労の多い道を進むことになります。

しかし、中国、日本という大国の狭間で琉球をどう立て直し、新しい時代に適応できるような国造りが出来るかどうかという宿題が、この1609年の薩摩の侵攻以降の近世という時代に始まります。

今日私が皆さんに紹介する事例は、大変厳しい時代を迎えて、沖縄の先人たちはどう格闘したかという問題です。その中で、今日でいう公共事業、土木に絡む事業分野でどのようなことが行われたのかという問題を、皆さんにご説明したいと思います。

薩摩軍に敗れたのですから、当然様々なペナルティが課されます。琉球にとって一番大きなペナルティは、この沖縄本島の北に与論島から始まる奄美の島々があります。与論の北に沖永良部島が、その北に徳之島、奄美大島、喜界島と続く奄美の島々がありますけれども、そこは首里城の王が支配しておりました。戦争に敗れた事によって、その島々を薩摩の領土として割譲しました。現在、奄美の島々が鹿児島県の一部であるというのは、そういう歴史的な事情に由来する訳です。もう一つは、これも大きな負担だったのですが、毎年多額な税金の負担を義務付けられました。お金ではなく、琉球の特産品であるとか、生産物薩摩藩に税として納めるという経済負担を抱えることになります。

戦争に敗れた結果、奄美の島々を取られ、経済的な負担を強いられたということですので、戦争が終わった以降の琉球の資料を見ると、当時の琉球社会がいかに目標を失い沈滞していたかがよくわかります。それ以前は、アジアの国際社会に羽ばたいていた国だったのですが、それが戦争に敗れた事によって大変な状況を迎えてしまうということになった訳です。しかし、この厳しい状況の中でも、それを打開するリーダーが出てくるんですね。その一人が羽地朝秀（はねじちょうしゅう）という人物で、もう一人が中国名を蔡温（さいおん）と名乗ったリーダーであります。この二人が、大変大きな仕事をします。

まず羽地朝秀という人物ですけれども、彼は首里城の王に仕えるナンバーワンの行政ポスト、摂政（せっせい）に就任します。日本の歴史では摂政（せっしょう）と言いますが、琉球の歴史では摂政（せっせい）と呼びました。彼は７年ほどこの摂政の地位にいまして、７年間大鉈を振るって琉球の改革を行います。実は、この中から公共事業の論理、土木事業の論理が登場して来るのです。彼は琉球王国に再び活力を与えるための政策を次々と推進するのです。そしてそのバトンを受け取ったのが蔡温というリーダーであります。この二人の登場によって、琉球王国の公共事業とそれに込められた戦略という問題が見えて来るのではないかと思いますので、この二人の人物に即しながら皆さんに紹介したいと思います。

まず羽地朝秀の事ですけれども、彼は３回ほど鹿児島に出張しています。話し合いの内容は判りません。なぜなら、薩摩側の資料が存在した鹿児島城（鶴丸城）が、明治の初年に火災で焼けてしまったからです。あのお城にあった膨大な当時の薩摩藩の行政資料が失われてしまいました。しかし断片的に残っている資料から推測すると、彼は率直な自分の考えを薩摩側に対して説明したと思われます。それは何かというと、琉球を改革して再び活力を取り戻したい、琉球に元気が無いと、薩摩にとってもメリットが無いだろう。琉球が栄えたほうが薩摩のプラスになるはずだ。だから、これから自分は琉球に活力を与える大作戦を展開するので、薩摩はそれを理解し支援して欲しい、というような事を、どうも鹿児島に行って主張したようなのです。彼の説得は成功したようで、薩摩側も理解しました。「お前のやる政策を薩摩としても理解し、バックアップしよう」という約束を取り付けたようなのです。

そのような根回しをした上で、彼は琉球の改革に本格的に取り組む訳ですが、何をしたかというと、まず意識改革を徹底的に主張しました。彼がやった改革の資料が残っていますけれども、信じがたい事が沢山出てきます。当時の琉球の価値観、既成概念を悉く打破しようとしている。厳しい時代を生き抜く新しい価値観、パラダイムを次々と提案していて、反対する者がいたら情け容赦なく批判した。琉球生き残り作戦を推進するために、まず琉球人の意識を変えようということを徹底的に彼はやりました。

それから二つ目は、首里城に本部を置く行政機関を首里王府と言ったのですが、つまり琉球の島々を経営するこの政治行政機関を強化するということを徹底的にやっています。徹底的な意識改革と政治行政組織の強化を図りました。彼は７年後に引退しますけれども、引退直後に彼が書き残した言葉が残っています。「７年間、琉球に活力を与える作戦のために、まさに昼夜を問わず心血を注いで努力してきた。しかし、この７年間、自分を理解する者は琉球には一人もいなかった」と述べています、それくらい孤独で敵の多い荒療治をしたんだろうと思います。

羽地朝秀が行った改革の具体的な例を挙げると、それは基幹産業としての農業の振興です。つまり、農地の拡大と砂糖の生産を基幹産業化して、琉球経済を拡大、発展させようとした。というのは、たしかに薩摩藩に払う税金はかなり多額だったんです。しかし、単純化して言えばその額は毎年が決まっていた。例えば琉球経済の規模が100億円で、薩摩への税金が10億だとしますと、これは10分の１負担になりますから厳しい。だが、琉球経済を200億、300億、400億という規模にまで拡大していけば、薩摩への税負担は相対的に小さくなっていきます。彼がやった政策とは、田畑の面積を増やし農業生産額を増加させる、というものでした。そのために急激な田畑の開発が行われました。これがまず一つです。

二つ目は、砂糖生産、つまり糖業の振興です。サトウキビ畑を開き、サトウキビを植えました。収穫したサトウキビを圧搾して、大鍋で炊き詰めて飴状になったら、適当な分量の石灰を注ぎ凝固させて黒砂糖にします。製造したこの黒砂糖をどこに売ったかというと、徳川日本というマーケットに売ったわけです。それでもって、今ふうに言えば外貨を獲得するという経済政策を推進したのです。

つまり農業生産額の増大と、戦略産業としての糖業振興を切り札にして、琉球経済の規模を拡大し薩摩への負担を下げ、琉球を活性化するという作戦を展開したのが、羽地朝秀というリーダーだったわけです。その結果、琉球が少しずつ上向きになります。

そして、上向きになった状況の中で、バトンを受け取って次の時代の琉球王国経営を担当したのが蔡温という人物です。

彼はその名前の通り、中国から琉球に移住した中国人の末裔です。しかし移住した先祖から数えると350年ほども経っていましたので、中国人という意識はなく、むしろ琉球人というアイデンティティーを持っていました。蔡温は先輩羽地朝秀のバ

トンを受けて、25年間、首里城の王を補佐する三司官という大臣クラスのポストにいました。そして、先輩羽地がやった改革路線を継承して、さらにそれを発展させていくという役割を担います。蔡温の時代に関する資料は結構残っていますので、今日はこの蔡温時代の話が中心になります。公共事業とか、公共土木という概念で説明できる各種の事業は、この蔡温時代の資料から本格的に登場します。

羽地朝秀から蔡温に至る過程の中で、公共事業として目立つものは道路の整備です。なぜ基幹道路(宿道)の整備が必要だったかというと、一つは行政上の運輸・通信のためです。もう一つは、各地で製造された砂糖を運搬するためです。糖業の発展によって道路整備が必要になって来たという関係になります。ただし、琉球の島はアップダウンが結構ありますので、陸上の道路だけで砂糖を運搬することができない地域があり、その場合は海上輸送になります。産地から船で那覇の港まで運び、徳川日本にそれを出荷するということが行われていた訳です。

また、沖縄の島には小さな河川が多数あり、そこに架けられていた橋はほとんどが木造の橋でした。梅雨の時期の鉄砲水で、この木造の橋はしばしば破壊されました。砂糖樽を積んだ荷馬車が通る時に、木造の橋では負荷に耐えられない構造的な弱さもありました。羽地朝秀から蔡温の時代にかけて、琉球の橋が次々と石造の橋に切り替わっていきます。それらの橋が何のために造られたかという理由を丁寧に説明した行政資料は残っていませんけれども、木造の橋から石造の橋に替わったときに、工事の竣工記念碑、つまり碑文が建てられました。どういう目的でこの橋を石の橋に替えたか、いつ起工しいつ竣工したかについて碑文は書いてあります。そして何人の人間がこの工事に動員されたか、予算は幾らかかったかという事が書いてあります。また、その碑文の中には渡り初めをいつやったか、渡り初めに参加したのは誰なのかも書いてあります。それから橋の工事を担当した、今でいうプロジェクトマネージャーの名前も書いてあったりします。つまり石造の橋の架け替え工事について、石に刻んでその情報を後世に伝えようという、自覚的な努力をしたことが判ります。普通は、おめでたい言葉や美辞麗句を並べるはずなのですが、そうではなく、記録として石に刻んで残しています。我々、歴史を勉強している人間は、その碑文に刻まれた情報を分析検討して、木造から石造の橋に切り替えられた意味を考える訳です。

私のレジュメに福建型の橋梁技術とメモしてあります。木造から石造の橋に切り替えるのですけれども、しかし、沖縄は梅雨の時期にかなりの量の雨が降ります。沖縄の河川は小さな河川ですけれども、集中豪雨的な雨が降りますと川が暴れます。石造以前の木造時代には、濁流や増水によって結構橋が破壊されていました。石の橋に切り替えても、川が暴れると折角、造った石造の橋が保たないという事も当然考えられた訳です。沖縄のその梅雨時の集中豪雨的な状況に対応するために、琉球の人間が学んだ技術が当時ありました。それが福建型の橋梁構築の技術なのです。私が提示した地図の中に、中国の福州という、琉球の人間が頻繁に行った都市があ

ります。そこには琉球館という出先機関がありました。現在は人口500万人ほどの大都市です。福州のはるか西に、福建の屋根と呼ばれる武夷（ぶい）山脈という山々があります。そこに源流を持つ福建随一の大河に閩江(びんこう)という川があります。西から東に向かって流れ、東シナ海に注ぐ大きな川です。この川は、雨季になりますと大量の水を集め、しばしば暴れたんです。固定式の橋が造れないほどに川が暴れたんです。皆さんは、日本という国をジパングと呼んで黄金の国だと紹介したイタリア人マルコ・ポーロをご存知ですよね。「東方見聞録」という本を書いた人です。彼は、中国の元の時代にシルクロードを利用して中国までやって来まして、当時は今の北京を大都と呼んだのですが、そこに長く滞在しました。やがてヨーロッパに帰って行くわけですが、彼は泉州という町から船に乗って帰ります。彼の「東方見聞録」を読むと大変面白いことが書いてあります。彼はまず福州に滞在して、その後で泉州に行きます。福州から泉州までは大体南に200kmですが、この時代の泉州というのは中国最大の国際貿易港でした。ここで船を見つければヨーロッパに帰れたのです。マルコ・ポーロは福州の町の様子を説明しています。その中に、閩江に架かる橋のことが説明されているのです。彼の見聞録を読むとおもしろいことが判ります。じつは閩江という大河には、明代に造られた中国の石造の橋を代表する万寿橋という橋が今でも残っています。マルコ・ポーロが中国に来たのはその前の王朝である元の時代です。マルコ・ポーロによると、福州の閩江に架かっているのは固定式の橋ではなく浮橋だったんです。流れがあまりにも早いために、小船を横に並べて筏(いかだ)を組むのです。その上を人が歩く訳です。イギリスの学者のジョセフ・ニーダムという人が書いた「中国の科学と文明」という本の中でも指摘していますけれども、この閩江という川はものすごく流れが速いんです。普通の構造の橋では持たない。結局、浮橋、船を浮かべて筏を組むしかなかったという訳です。技術的にそれを克服したのは、マルコ・ポーロが帰った後の次の明の時代であり、やっと閩江という暴れる川に石造の橋が架けられ、それが万寿橋として今でも残っているのです。

なぜこの話をしたのかといいますと、その技術の注目していただきたいからです。浮橋から石造の橋に変わった時に、橋の橋脚を載せる基礎、つまり水切りですが、これが所謂、福建型と呼ばれる独特の技術でした。船のような形をした石造の水切りを造り、川上から勢いよく流れて来る強力な水圧を、まるで船の舳先のように水を切り、水の抵抗を小さくするような形にしたのです。そういう革新的な技術を実現することによって、その上に橋脚を構築し石造の橋の本体を架けることができたのです。ジョセフ・ニーダムという大学者はそれを「福建型」と呼んでおります。この技術を開発したことによって、それ以降、福建あたりでは石造の橋が次々と普及していきました。

実は、琉球の人間が注目したのは、この福建型の橋なのです。先ほど言いましたように、琉球で羽地朝秀から蔡温の時代に、次々と木造の橋から石造の橋に切り替

えられていったという前提にあったのは、福建の技術を取り入れることが可能だったからだと思います。それによって、小さな河川ではあるが、集中豪雨で暴れる琉球の川、その濁流に呑み込まれないような強度を持つ橋を造る技術が琉球に移転され、その技術が定着し普及したということなんです。ですから、そういう点では、基幹道路である宿道の整備が始まって、それに連動する石造の橋が普及して行くのですけれども、その前提にあったのは、当時の首里城の行政マンたちが何度も福建に行って、「あの技術を取り入れたら琉球の問題が解決するかもしれない」と思い、その技術移転を図った、という点が重要なのです。それからもう一つの問題は、先ほど羽地朝秀の時代に、田畑の面積を拡大したと言いました。そうなりますと、農業の総収穫高が当然のように増えて行く訳です。サトウキビを植え黒砂糖を製造して徳川日本に売るというビジネスも始まったという話をしましたが、これらはどういう結果をもたらしたのかというと、一種の乱開発のような状況をもたらしました。つまり、それまでは樹木が茂り、緑の空間だった場所を切り開いて水田や畑にしていった。今までは林野だった場所を切り開いてサトウキビ畑を作った。何が問題になったのかというと、産業の発展は良いんだけれども、結局のところ林野面積が著しく減っていくという状況が生まれたのです。これがまず一つです。

集中豪雨のような雨が降ると、林野が減った分だけ当然土砂が流れ、自然災害というものが次々と発生するというネガティブな問題が出てきます。それからキビ畑を開くのは良いのですが、キビは収穫した後に、汁を搾り何時間も大鍋で炊き詰めます。すると飴状になり、タイミングを見て石灰を加えると凝固して黒砂糖になるのですけれども、そのためには大量のエネルギーとしての薪が必要だったのです。そうなると、燃料としての薪を切出すため、結局は山の緑が次々と減っていくという現象が生まれました。それからもっと深刻だったのは、キビを収穫したあとに2つのローラーを回転させて、その間にキビを差し込んで圧搾し汁を搾る訳です。そのローラーに何が使われたかというと、琉球松の大木を使ったのです。松を輪切りにしてローラーに使った。それでサトウキビは搾れるのですが、当然やがて劣化します。そうすると、それを廃棄してまた新しい松を切ってローラーを作っていく。次々と松の大木が姿を消していくという状況が生まれました。それから、黒砂糖をつくるときにもう一つ問題だったのは、出来上がった黒砂糖を樽詰めにして船に積み、徳川日本にこれを売り込んだのですが、そうなると樽を作るためにまたしても樹木を伐る訳ですから、山林資源が消費されるという現象が起こりました。

もう一つ、宿道という基幹道路が整備されて、それに連結する石造の橋に切り替えられていったと言いましたが、陸上交通では対応できないところは船を使いました。むしろ船による交通や運搬が活発化しました。その中心的な役割を担ったのは民間の海運業であり、つまり、海運業がいいビジネスとして展開していきます。そうなると造船需要が増大し、船を建造するためにまたしても山の木が伐られました。

羽地朝秀という改革者がやった事業が軌道に乗り琉球は上向きにはなったけれども、その中からネガティブな問題が次々と登場して来たという訳です。その問題解決に応えようと挑戦したのが実は蔡温という人物だったのです。

私の講演資料の中に書いてありますが、蔡温の政策の中に杣山（そまやま）政策というものがあります。琉球はちっぽけな島々の国でしたので、木材を海外から簡単に輸入できません。自分たちの島の中で必要な木を育てそれを利用する、つまり基本的に自給自足でなければ維持できなかったのですけれども、その自然サイクルを崩したのが実は羽地朝秀が始めた農地の開発、そして砂糖の生産とそれに関連する諸々の問題でした。琉球の山林資源を保護し育成するという政策を展開したのが、蔡温の杣山政策と呼ばれるものの本質でした。彼の政策はかなりきちんと作られていまして、この分野の専門家達は、世界的に見ても非常に珍しく体系的な山林資源の保護育成政策だと言っています。その政策を推進するために組織や法律、罰則規定に始まり、樹木の育て方や山の盛衰を観察するためのテクノロジーといった技術的な問題まで、蔡温は体系的な体制を構築しました。そういう体系的な政策を構築して、羽地朝秀の改革による琉球社会の活力を継承しながら、その中から出てきたネガティブな問題を解決することを目指して、彼は杣山政策を推進するのです。彼はまた、抱護政策を推進しました。「抱護(ほうご)」は蔡温がつくった言葉です。この言葉は彼の事業を考えるうえで一種のキーワードみたいなものでありまして、皆さんご存知の「風水」説の概念です。蔡温は、中国風水の知識をかなり勉強しておりまして、それを琉球の風土に適用する努力をしたんです。その結果が彼が考えた「抱護」という概念です。単純化して説明いたしますと、こんな感じです。そこに海があります。沖縄のサンゴ礁の海の特徴は、ここが砂浜だとしますと、その前は浅海で、英語ではラグーン、沖縄の方言ではイノーと言います。現在の沖縄の有名なビーチは全部がそのイノーを利用したものですよね。沖の方にはヒシ、英語でリーフと呼ばれるサンゴ礁がありまして、そこから先はストーンと海が深くなります。台風の強い風で巻き上げられた潮がこのヒシにぶつかるんです。そして潮が吹き上がります。吹き上がった潮が、風に乗って島の中に注ぎ、潮害を起こす原因になったんです。したがって長い間、琉球では海岸に近い場所には、田や畑が開かれませんでした。何しろ潮を被りますので、利用していなかったんです。蔡温が唱えた抱護という概念は、このような問題を解決するためのテクニカルタームでした。

彼が最初にやった作業は、田や畑の面積を増やして行ったのは良いんですけれども、当然海岸に近いところまで開発が進んで行きます。しかしそこは台風襲来時には、風の害、潮の害を受けるというリスクが非常に大きい場所です。どうしたかというと、そこにグリーンベルトを造るんですね。これが「浜抱護」と呼ばれ海岸線のグリーンベルトです。海に一番近い所にアダンという植物を植えるんです。このアダンは潮をかぶっても枯れません。プロテクターのようにアダンの木を植えていって、その内側に骨格的な樹種としてテリハボクという頑丈な木を植えました。前

面のアダン、そして軸をなすテリハボクという木を植えて、さらにその内側には島の人々が使えるような建築材、家を建てるときに使う有用性の高い樹木を植えていきました。現在、多良間島や久高島に、「浜抱護」が良く残っています。幅の大きいところで大体50mほどもあります。その幅のグリーンベルトを島を囲むように植えたのです。それよって開発された農地を守るのです。すると、島を縁どるように厚手のグリーンベルトが形成され、島の内と外の境界をつくると同時に、島の内側を守ることができたのです。このグリーンベルトによって島を守るという概念、それが「浜抱護」という考え方でした。　そしてさらに徹底していたのは、島の中に入って行くと集落があります。この集落の周りにも、今度は樹種を変えまして、フクギという木を植えた。その木で形成されるグリーンベルトで集落全体を包み込んでしまう。これが「村抱護」といわれる蔡温の考え方です。さらにまた、この集落の中には各屋敷がありますが、屋敷の回りにも「屋敷抱護」といって、フクギの木でこれを囲むというような徹底ぶりでした。この「抱護」というキーワードを使って、人々の生活を守るための政策を展開したのです。どれくらい徹底していたかというと、この浜抱護については、首里城の行政機関が直接やる事業ではなくて、一定のマニュアルや事業プランは作っていますけれども、実際に実施するのは地方行政でした。そして各集落の村抱護については、集落の住民が共同して行う事業でした。当然のことながら、屋敷抱護については各世帯が責任をもってそれを行います。つまり、中央政府がプランは作りますが、実施主体は地方の行政あるいは地方単位で実施するという形で行われていました。

ただし、中央政府がやった政策の中に、例えばこんな事実があります。「科松(とがまつ)」という軽犯罪への罰則です。人の畑の農作物を盗んで捕まったとか、人を殴り軽いケガをさせたとか、そういうような罪の罰として松などの植林を課すのです。「お前は30本の松を植える処罰とする」という訳です。アダンやテリハボクの内側に琉球松を植えさせたりする訳です。自分の罪を許してもらうために、罰として植林をさせたのです。それもまた「抱護」を育てるという政策に関連しており、琉球の島々を自然の脅威から守るという効果がありました。

つまり、海側の抱護と、村の抱護と、屋敷の抱護という３つの組み合わせによって、安定した生活基盤というものを造り出すというのが抱護の考え方なのです。

ただ、抱護に守られた集落で問題になったのは、その場所は海岸に近い砂地でした。なぜ、砂地に集落が立地したのでしょうか。実は、蔡温は土地利用計画を抜本的に変えました。今日は具体的な話はできませんが、抽象的に言いますと、その集落は元々は小高い丘の上に在ったのです。しかしその場所は米を作ったり、粟や大豆を作ったり出来る農地として利用可能な所です。そこで痩せた海岸の砂地の処に集落を移動させ、集落の跡地は水田や畑として利用されたのです。これで耕地面積が増え、農業生産額が増えていったのです。　それはそれで良いのですが、海岸に近い砂地に新しい集落が出来たために、困った問題が発生しました。砂地に育つ植

物で、人々の食料となる作物をどうするかという問題です。それを解決したのがサツマイモなのです。米作りや粟作りという通常の農業とバッティングしない、新しい悪環境で育つのがサツマイモだったんです。砂地の畑でサツマイモは栽培され、日常的な主食となり、大変重要視されたのです。そしてさらに、畑にも使えない、サツマイモさえ育たないという荒れ地に植えたのがソテツだったのです。他府県から来た方はご存知ないかもしれませんが、ソテツは食べられるんですね。実は味噌にしますが、幹は剥ぐと中から白っぽい肌が出てきます。そこをぶつ切りにして水溶性の高い毒を水に晒して抜きます。そこは豊富な澱粉があるので食料にしました。ですから、砂地の畑にサツマイモを植え、山側の荒れ地の石ころだらけの場所にソテツを植えて、食糧源を確保しました。もう一つ厄介な技術的な問題がありました。集落は砂地ですので、生活用水をどうするかという問題です。砂地の何処に井戸を掘れば水が出るかと言うことです。その地質を観察して、ここに縦穴を掘っていけば、水脈に達するはずだ判断できる技術者が必要だったんです。それから集落を移転させた時にも、集落全体を東西南北のどの方角に向かって造るか、集落プランを検討する必要があります。冬の強い北風や、夏の涼しい南風を考えながら、風の入り具合であるとか、集落の向きであるとか、集落の中心になるセンター機能をどこに置くかとか、そういう問題を検討できる知恵が必要です。そしてもう一つ大事な問題、何処に井戸を掘れば水脈にあたるか。

集落の移動プランをつくり、集落の立地計画をつくり、屋敷抱護から始まって、村抱護、浜抱護まで全体を見通す技術的な指導をしたり、水脈を当てるような専門家、この人びとがいわゆる地理師です。風水師とも言います。この人達無しには、羽地朝秀そして蔡温に至る様々な政策というものは推進できませんでした。この人材を福建省に派遣して修行させたり、福建で学んで琉球に戻ってきた先生のもとで勉強させるという、今でいう人材育成計画のようなものが当時作られています。その人材集団がいたからこそ、政策が推進できたのです。風水というのは、現在の日本人からすると、あまり科学的ではなくて、何となく迷信めいたものだというイメージの方が強いのかもしれませんが、そうではありません。当時の地理や風水の学問というのは、今でいう環境工学、土木工学、景観工学、都市計画、それらを全部総合したような学問、テクノロジーでした。その学問の先端地が中国福建省の福州だったんです。福建風水と呼ばれた中国のメッカのような場所に行って、琉球の人間たちは修行し、基礎理論を勉強してきた訳です。しかし、その技術を琉球の風土に合った形に応用したのですが、その最たる例が「抱護」というカテゴリーなのです。実は、蔡温自身が、福建で学んだ優れた風水師、地理師だったんです。彼は山林資源の保護育成のための体系的な制度を作ったと言いましたが、同時に彼は山の見方や育て方について非常に面白いテクニカルな本を書いています。また、暴れる川をコントロールする為に、流体力学に近いような理論書も書き残しています。彼は首里城の王に仕える大臣クラスの行政マンだったんですが、その彼自身が技術者でも

あったんです。土木や公共事業を推進できるテクノクラートでした。その彼が首里城の行政のトップにいたという事が、とても大事だと思います。彼は引退する間際に、自分の仕事を回想した１冊の本を書き残しています。「自叙伝」という本です。その中にこんなエピソードを紹介しています。福州に滞在していた時に、とんでもない凄い人がいるという噂を聞いて、その人に会いに行った。その人に逢うと「何処から来たのか」と聞かれ「琉球から来ました」と言ったら、「琉球は何処にあるのか」と聞かれた。「此所から東の海のほうに10日間ほど船で航海した所にある島です」、というような世間話をした。やがてその先生が、「君は何のために福州に来ているのか、何のために学問しているのか」と聞いた。「私が勉強し自分を磨くことは、琉球人民の生活を豊かにし、琉球という国を豊かにすることに繋がる。そのために自分は学問をし、自分を磨いているのです」と答えたところ、その先生が笑った。頭にきて、「どうして真面目に答えているのに笑うのですか」と言ったら、先生は「琉球という国が豊かになり、琉球の人民たちが幸せで豊かになる為には何をすれば良いのか。その具体的な計画を説明してみろ」と言われた。そのときに蔡温は、全く返す言葉がありませんでした。その先生曰く、「学問とか事業という企てには必ず目的があり、その目的を遂行する為にどういう手立てが必要か、という問題がある。その手順を更に推進する為にどういうテクノロジーや、それに必要な知識、技能というものがある。その全体を見通すことによって初めて、そういうことが言えるのだ」、と言われ、蔡温は絶句した。それから自分は変わったのだ、と蔡温は「自叙伝」の中に書いています。　彼があえて自分の過去の体験に触れたのは、彼自身がそういう体験をして、兎に角、何をどう具体化すれば琉球という国が豊かになり、そこに暮らす人々が幸せになれるのか、ということを強く肝に銘じて仕事をしてきたのだ、と強調するためでした。だからこそ自分は、風水師・地理師であり、公共事業や土木事業に必要なあらゆるテクノロジーを身につけてきたのだ、と言いたかったのです。

彼は太陽の動きも観察しています。首里城の一角に日影台という日時計があります。通常は水時計を使って時間を計るのですが、その誤差を修正するために、昼の12時前後の太陽の動きを見て、そこで得られたデータにより水時計の誤差を修正しました。水時計と日時計の両方を併用して、首里城での時間が計られていました。太陽の動きに関するデータは中国の文献を使っていたのですが、しかし、中国と琉球では緯度や経度が違いますのでそのままでは使えません。そこで蔡温は琉球の太陽の動きを知るために、丘の上で器材を使い太陽の動きを観察したんです。そういうことも出来る、まさにマルチ型の人間が、琉球のトップだったということです。

お手元のレジュメに「羽地大川改修事業」と書いてあります。蔡温が生涯をかけた事業の中で、最も大きな事業の１つがこの羽地大川の改修事業だったのですが、その事業に関しては詳しい記録が残っています。どんな準備をして、どのように事業を実施したかが書いてあります。蔡温らしさがその事業にはよく表れています。北

部の名護市に羽地大川と呼ばれた比較的大きな河川がありました。その川の周辺には水田が開かれていて、米づくりが行われていました。羽地朝秀以降に水田面積を増やしたために、下流域に近いところまで水田開発が進みました。問題だったのは、そのことによって特に集中豪雨の時期に、大量の水が流れ川が暴れたんです。せっかく苦労して開いた新しい水田地域が全部土砂に埋もれてしまうという被害がしばしば出ました。そこの水田地帯は、当時の琉球経済にとって実は大変重要な米作地帯だったのです。そこがダメージを受けると琉球経済にボディーブローのように効いて来る。この問題は放置できないと蔡温は考えました。治水事業をして流れを変え、川をコントロールしようと考えました。これが羽地大川改修事業です。

最初に彼は少数のスタッフを連れて現場の視察に行きました。彼は、かなりのテクノロジーを持つ人間でしたので、現場を見て何が問題なのかについてある程度見抜いてしまいます。彼は何度か視察に行っていますが、その際には次代を担う若いスタッフを必ず連れて行っています。そして川を観察し、村人にヒアリングを行って、豪雨が降った時に川のどの部分が決壊するのか。最初にダメージを受けるのは、水田のどの地区かという徹底的な調査を行い、暴れる川の動きを把握するという作業をやっています。大規模な改修のケース、中規模の改修のケース、小規模の改修のケースという３つの選択肢がある中で、それぞれにかかる経費を算定させる。どれくらいの労働力、延べ動員数が必要かも計算させる。そして、最終プランを決めていく訳ですが、決めた段階でそれに必要な資材、予算、労働力を含めた全体事業計画をつくっていきます。記録を読んで驚いたのは、準備に相当な時間を費やしたにもかかわらず、実際の治水事業は非常に短期間に、しかも極めて円滑に、無駄のないように一気呵成に仕上げたことがわかります。

中国で偉い先生にこっぴどくやつけられ、反省したという蔡温の真価が、この羽地大川改修事業によく表れていると思います。要するに、琉球の河川が暴れ、水田がやられ、米の収穫が減ってしまうというダメージをなくす、あるいは減らすために、自然の川を相手に格闘する。そのために必要なテクノロジーとは何か、について具体的に考える。そして最終的に適正な予算規模でこの事業が実施できるか。この事業を展開する際にかかる経費を、効率よく抑えられるか。こうした問題を徹底して考えたことが良く解ります。そして、私が感動したのは、彼が動くところには常に若いスタッフがいる。蔡温のものの見方、考え方、事業の進め方といったものを、事業の具体的なプロジェクトを通して後輩たちに伝えている姿です。

羽地大川改修事業というものに、まさに蔡温らしさが発揮されています。浜抱護があり、村抱護があり、屋敷抱護があって、それによって琉球の国土を具体的にどう守るか。人間がなかなか制御しにくい河川の氾濫を出来るだけ抑え、それによって琉球という国土をどう守っていくのかという問題を、彼は具体的な形で実践したのです。

もう一つ、墓の問題があります。集落を移動させたと言いましたが、墓もまた移動させられたのです。その場所は田や畑になる、有用性の高い土地なのだと。蔡温の改革が行われるまでのお墓は、比較的島の内側の見晴らしの良い小高い丘にあったのですが、そこは土地利用の観点からいくと畑として使えます。要するに土地利用の見直しが行われた訳です。実際に次々と墓が移転させられておりまして、その墓は何処に移転させられたかと言うと、農地としては使えない場所、島の奥のほうの斜面とか崖の下とか、そういう場所でした。

墓を移転させるために必要な人材がおり、それもまた地理師、風水師だったのです。彼らが墓の向きだとか墓の造り方とかについて、風水説に基づいたアドバイスをしたのです。首里城には、実は高所（たかじょ）というお役所がありまして、土地利用を仕切る役所でした。墓を造る際にはその役所に申請書を出し、許可が必要でした。申請書には墓の図面を付けるんです。今のような平面図というよりも鳥瞰図っぽく描いてあります。その図面を描いたのが、やはり風水師だったのです。 他府県の方々もそうお考えだと思いますが、沖縄は祖先を大事にする地域です。独特のお墓があり、亀甲墓や住宅風の破風墓というのがあったりして、とにかく多彩な墓が沖縄の各地にあります。その古いお墓のある風景は、自然発生的にそうなったのではなく、当時の琉球の土地利用の抜本的な見直しや、それに基づく風水説が作り上げた風景なんです。

お手元のレジュメに「海運の隆盛と港湾整備」と書きました。海運業が活発になり造船需要が高まった結果、それと山林資源を守るという政策をどう調整するかというのが蔡温の杣山政策の課題の一つでした。しかし、海運業が発展するのは良いんですけれども、例えば那覇港、その北のほうに泊港という港があり、その港には河川が土砂を運んで来て、しばしば港が浅くなりました。大型や中型の船になりますと、船底が引っかかります。土砂が流れ込んで安心して港が使えないという事がしばしば起こった訳です。当時の首里城の政府は、しばしば港の浚渫工事をやっています。それだけではなく、お金は持っているが身分の低い篤志家に呼びかけて、身分をあげる代わりにお金を出せというふうにして、その人たちのカンパによって、浚渫工事が頻繁に行われています。

問題はその際の技術です。今でも良く解らないのです。那覇港には大型船を係留できる唐船グムイという場所があったんですが、そこにも土砂が流れ込んできた。浚渫工事をやるのですが、これは当然水中土木になるんですよね。港底に溜まった土砂をどういうふうに浚渫できたのか。実は、今でもなお琉球の水中土木的な技術は解っておりません。どんな機材を使い、どういうふうに土を浚ったのかというのが実は解らないんです。しかし、技術的な実態はよく解りませんけれども、確実に港の頻繁な浚渫工事が行われていました。この浚渫工事を指導したのも蔡温という人物です。彼が書き残した本の中に、港の浚渫や水中土木に関するコメントは残っ

ていないのです。それで良く解らないのですが、水中土木技術を駆使した浚渫工事が当時の琉球にあった事だけは明らかです。

最後に蔡温の言葉を紹介して、終わりにしたいと思います。

彼の名文句に、「小計得(こはからえ)から大計得(おおはからえ)へ」というものがあります。小計得というのは、目の前の問題と格闘して、これをどう解決するかという事です。大計得はその先に横たわる20年、30年先、あるいは50年、100年先を見ろという考えです。長期的な展望をもって、今という時代に向き合うことが大計得で、眼前のさまざまな諸問題というものにからめ捕られ、その現実と格闘していることが小計得なのです。我々は、一般的には小計得という場面で仕事をしている。しかし、琉球という小国が生きていくためには、勿論、小計得はちゃんと行わなければならないけれども、小国だからこそ一番大事な問題は大計得である。この観点を失った時に、琉球は滅びるであろうとさえ彼は言っているのです。彼は、自分が一貫して追求した問題は琉球にとっての大計得だった、と言いたかったのだと思います。

皆様は公共事業、土木事業にかかわるコンサルタントのお仕事をされている訳ですけれども、私の提案が正しいかどうか判りませんが、一言だけ最後に問題提起をしたいと思います。

今日お話をした「浜抱護」とか「村抱護」、「屋敷抱護」という緑をめぐる問題は琉球王国の政策でした。つまり、緑は単なる趣味ではなく、緑によって琉球という国土を形成することが発展につながるので、そのための政策を推進した結果として、現在の沖縄の伝統的な風景、風致というものが生まれたのです。　残念ながら、蔡温時代に体系化され実績を挙げた事業は、明治12年の春に首里城が明け渡されて沖縄県となり、そこで止まってしまう訳です。杣山の多くはやがて国有林となり、林野行政がそれなりに頑張ることにはなりますけれども、しかし琉球の風土に合致し、風水説というものを踏まえて創造された緑の風景に込められた思想や気概、緊張感のようなものはしだいに失われていきました。１世紀以上の時間を経て、今どこに何が残っているか、私は沖縄の島々を何度も歩いてみました。皆無ではありません。先ほど言いましたように、小さな離島あたりには今でも残っています。一番よく残っているのは、宮古の多良間島という島です。深い「浜抱護」の森が今でも残っています。ただ、多くの場所では昔の浜抱護は切り払われて、埋め立てられたり、コンクリートの護岸などに変貌しています。

そのことが悪いと言う訳ではありません。安全性や機能性、安定性は大事です。私が申し上げたいのは、そのような現代の公共事業や公共土木事業が、どのような思想や哲学を持ちながら推進され、どのような景観や風致を創造したのか、そのことを絶えず点検する気持の必要性です。現代の私たちの事業というものは、あの抱護のような、そしてそれに代わる新しい魅力を形成しつつあるだろうか、という目

線の大事さです。利便性や機能性などのさまざまな機能を持った形、構造といったものが、これからの時代の風景や景観、風

致として、どのように位置づけられていくのかを絶えず意識することです。

私のつたない話は、この程度にいたします。もし、皆さんからご質問があれば、私がわかる範囲内でお答えしたいと思います。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

○司会(石底)：それでは、高良先生に質疑応答のお時間ということで、冒頭でもご案内いただきましたので、もし何か今の講演に関して、また何か尋ねてみたいことがある質問などがございましたら、挙手をしていただけますでしょうか。スタッフがマイクをお持ちいたします。よろしければどうぞ。

○質問者：いろいろありがとうございました。大変おもしろく聞かせていただきました。

屋敷抱護ということを初めて聞いて、一番最初に思い出したのが、本部の備瀬のフクギ並木を思い出したんですけれども、ああいうイメージで捉えていいんですか。

○高良氏：ご指摘の本部町備瀬のフクギの生えている屋敷、あれがまさに屋敷抱護の典型です。ほかには、渡名喜島にも非常にきれいな屋敷抱護が残っています。

○質問者：本土から来た方々、ぜひ本部町の備瀬の屋敷抱護をご覧になることをお勧めいたします。

○高良氏：最近、うちの大学の農学部の仲間勇栄という教授が、屋敷抱護と村抱護を象徴するるフクギという木を徹底的に調査しています。しかも最近では、フクギの樹齢を算定できることが可能になりました。その研究成果を読ませていただくと、私のような歴史をやっている人間のデータとピタッと合うんです。古いフクギの樹齢は大体270年ほどですから、蔡温が活躍した時代に相当します。農学や自然科学の方々が出した結論と、蔡温の時代に村抱護や屋敷抱護の骨格的な樹種にフクギが選ばれたという事態は一致するのです。そうなると、当時のフクギが残っている訳ですから、それは蔡温のメッセンジャーなんですよね。フクギという木はもともと沖縄に自生していない木ですから。わざわざその木を海外から取り寄せて、抱護の中心的な樹種として選定したという訳です。

○司会(石底)：ありがとうございました。

私も、今感心しながら聞いておりましたが、そうだったんですね。

ほかにありますでしょうか。何か、高良先生に伺ってみたいというご質問がありましたら、ぜひどうぞ。

○質問者：先生の資料の２枚目に「ソテツ地獄」と書いてありますけど、これをもうちょっと詳しくご説明いただけたらと思います。

○高良氏：第一次世界大戦が勃発して、ヨーロッパが戦争をしましたので、先進国のイギリスやフランス、ドイツの輸出力が落ちるわけです。その結果、日本は好景気になりますよね。戦争が終わったあとに、今度は戦後不況が世界に広がっていく

訳ですが、日本経済も大きな影響を受けました。好景気の時に沖縄の基幹産業である砂糖の値段が上昇、高騰しました。ところが戦後の世界不況、恐慌の中で、糖価が暴落します。そのために沖縄の産業が大打撃を受けまして、人身売買とか、東京や関西への出稼ぎ、南米移民とかが活発になりました。

そのときに朝日新聞の記者が沖縄県に取材に来まして、当時の沖縄県経済の惨憺たる状況のレポートを書いています。沖縄県経済の破たん状況を表現するのに使ったのが「ソテツ地獄」という言葉です。毒のあるソテツを食わざるをえないほどに深刻である、と書いた訳です。

ただし、ソテツは先ほども申し上げましたように、昔はいざというときの食料でした。第一次世界大戦後の恐慌の時期には、ソテツを食べたことがない裕福な人間たちが、貧しさのあまり毒抜きの方法が判らずに、それを食べて死んでしまうという状況だったようです。よく食べている人間たちは安全なんですが、一部のそういう状況を見て、象徴的な言葉として「ソテツ地獄」を使ったんです。ですから、沖縄の地域経済が破綻している状況のことを、当時の新聞記者が表現したということです。

○質問者：ありがとうございました。

○司会（石底）：ありがとうございました。

さまざまな皆さんから質問を受けたいところですが、そろそろお時間がまいりましたので、これで記念講演のほうを結びとさせていただきたいと思います。

沖縄支部設立20周年記念講演、演題は「琉球王国の公共事業とその戦略」でございました。高良倉吉先生に、今一度大きな拍手をお送りくださいませ。

社団法人　日本補償コンサルタント協会沖縄支部創立２０周年記念式典
記念講演：

『琉球王国の公共事業とその戦略』

講師：高良倉吉（琉球大学・琉球史）

1　琉球の危機！　―薩摩侵攻（1609年）と「戦後」

2　二つの大国の間で生き抜くための王国の再興と推進

（1）羽地朝秀（1617～1675年、1666－73年摂政職）の戦略

（2）蔡温（1682～1761年、1728－52年三司官職）の戦略

3　公共事業あれこれ
（1）基幹道路（宿道）の整備、木橋から石造橋梁へ
＊福建橋梁技術（「福建型橋脚」）
（2）海運の隆盛と港湾整備
＊茶湯崎の場合、篤志家による那覇港浚渫
（3）杣山政策
（4）「抱護」政策
＊「浜抱護」「村抱護」「屋敷抱護」「科松」など
（5）羽地大川改修事業（1735年）
＊計画から実施まで、そして人材育成
（6）方法としての風水説

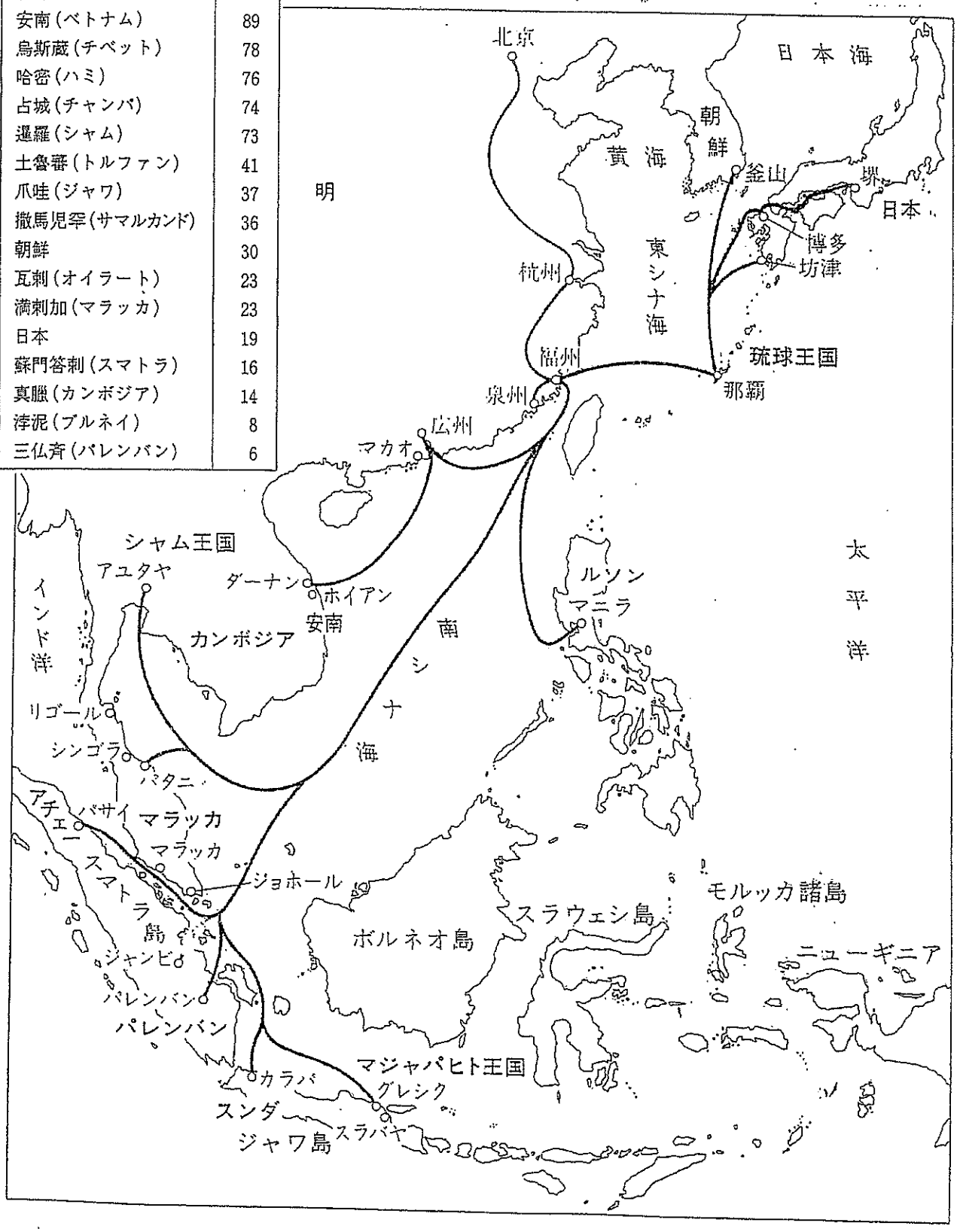
4　むすび―これからの課題
＊蔡温の言葉　⇒「小計得から大計得へ」
＊社会生活のためのインフラ整備と風致景観

資料／琉球・沖縄の歴史的推移

日本全体		琉球・沖縄をめぐる主な動き	
旧石器時代	先史時代	＊港川人（18.000年前）	
縄文時代		＊沖縄にも縄文文化が展開	
弥生時代		＊弥生式土器の出土	
古墳時代			
奈良時代		＊日本と一定の交流が存在	
平安時代			
鎌倉時代			
南北朝時代	古琉球	＊沖縄各地で大型グスクが登場	
室町時代		★琉球王国の成立（1429年）	琉球王国時代
戦国時代		★アジア諸国と活発に交流（万国津梁の鐘、1458年）	
徳川時代		★薩摩軍の侵攻（1609年）	
	近世	＊日本・中国とのバランス関係維持、文化の発展	
		＊ペリー艦隊来航（1853～54年）	
明治	近代	★琉球処分（沖縄県設置、1879年＝明治12）	
大正		＊海外移民、出稼ぎ者の増加	
昭和	現代	＊ソテツ地獄（沖縄経済の破綻）	
		★沖縄戦（1945年）	
	戦後・現代	＊アメリカ統治時代（27年間）	
		★日本復帰（1972年＝昭和47）	
平成		＊沖縄振興開発の推進	
		＊首里城の復元（1992年）	
		＊九州・沖縄サミット（2000年）	

『明史』に見るアジア諸国の対明朝貢回数』

順位	国名・地域名	回数
1	琉球	171
2	安南(ベトナム)	89
3	烏斯蔵(チベット)	78
4	哈密(ハミ)	76
5	占城(チャンパ)	74
6	暹羅(シャム)	73
7	土魯番(トルファン)	41
8	爪哇(ジャワ)	37
9	撒馬児罕(サマルカンド)	36
10	朝鮮	30
11	瓦剌(オイラート)	23
12	満剌加(マラッカ)	23
13	日本	19
14	蘇門答剌(スマトラ)	16
15	真臘(カンボジア)	14
16	浡泥(ブルネイ)	8
17	三仏斉(パレンバン)	6



琉球王国交易ルート概念図（１４世紀末～１６世紀後期）
（高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』、1998年、吉川弘文館より）

(社)日本補償コンサルタント協会沖縄支部
設立20周年祝賀会次第

祝賀会　　「天妃の間」17：30～20：00

司会　石底マキ

一　幕開け　（かぎやで風）

一、主催者挨拶　　副支部長　桃原昌宏

一、来賓ご挨拶　　那覇市長　翁長雄志殿

一、乾　　杯　　協会副会長　川畑清夫氏

アトラクション
＜かぎやで風，エイサー，空手演武＞
出演者：沖縄支部会員及び関係者（氏名別紙参照）

一、閉宴の辞　　研修委員長　嘉川　肇

出演者名簿

三線　伊波盛武（株沖縄総研）前栗蔵武（株松田・伸設計）
仲里司（株仲里一級建築士事務所）東江光雄（株沖縄地所鑑定）
新城嘉高（株松田・伸設計）新垣健栄（株都市建築設計）
川満義也（株アサギ総合コンサルタント）田中清貴（有色設計）
神谷昌宏（株沖縄総研）前川朝貞（株アート設計）天久朝和（事務局長）

踊り　田中静子　小濱恵子　伊波よし子　川満正美　嘉川ニース
山内昌富(株丸島建設コンサルタント)前川朝保（株アート設計）
前川美由紀

太鼓　小濱定和

笛　澤井毎里子

胡弓　大浜麻未

琴　国吉裕子（株鑑定ソリュート沖縄）

空手演武　沖縄空手・古武道小林流琉拳会
根路銘宗安会長　桃原昌宏　宮城正憲
根路銘宗太　根路銘竜志　小波津彩音

エイサー　具志堅壮（株アジア測量設計）並里健二（株沖縄総研）
我那覇生芳(有環境エンジニア)伊波正直(株具志堅設計事所)
宮良朝敏（株国吉設計）仲本徹（株国土鑑定センター）
川田勝則（有三和総合設計）座波政利（株大宝エンジニア）
銘苅久幸（株総合設計玉城）翁長朝順（株渡久山設計）
新垣正倫（株都市建築設計）福治拓夫（株福治不動産鑑定所）
仲程通虎（株松田・伸設計）與儀清人（株三杉設計）
新垣一郎（株タップ）當銘貴広（株タップ）
比嘉敏康（株オゼック）我那覇裕行(有すみよし)
真志喜徹也（株沖縄総研）東嵩西広晃（株与那嶺測量設計）
島袋隼人（株丸島建設コンサルタント）平良尚史（株沖縄用地測量設計）

主　催　者　挨　拶

（社）　日本補償コンサルタント協会
沖縄支部　副支部長　桃原昌宏

本日は、公務多忙の中、那覇市長　翁長雄志様をはじめとして多数の御来賓の方々が、私ども社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部の設立２０周年記念祝賀会に御出席頂きまして誠にありがとうございます。沖縄支部会員を代表いたしまして、厚く御礼もうしあげます。

平成 4 年に社団法人日本補償コンサルタント協会九州支部沖縄県部会から、独り立ちして沖縄支部を設立し今年で 20 年を迎えることが出来ました。それもひとえに、内閣府沖縄総合事務局、沖縄県をはじめとする沖縄地区用地対策連絡会の皆様方の温かいご支援の賜と感謝しております。また、協会本部、各支部の皆様にも日頃から支部運営に関してご指導、ご助言を頂き誠にありがとうございました。今後も補償コンサルタントとして誇りを持ち、沖縄の公共事業推進の一翼を担う組織として会員一同邁進する所存ですので、皆様方の変わらぬご厚情を賜りますよう改めてお願い申し上げます。今日の良き日を皆様と共に祝いたいと本席を設けました。お時間の許す限りご歓談をお願いします。

又、本日の余興は、支部会員が仕事明終えてた後、練習を積み重ねて先ほどの披露した幕開けの「かじゃで風」、この後演舞する「エイサー」等会員一同が心を込めて、皆様方をお迎えする準備をしてきました。プロではない手作りの余興をお楽しみ下さい。

最後に社団法人日本補償コンサルタント協会の益々の繁栄と本日ご列席の皆様のご健勝を祈念いたしまして、主催者の挨拶といたします。

本日はありがとうございました。

来 賓 祝 辞

那覇市長　翁長　雄志

ハイサイ　グスーヨー　チューウガナビラ

社団法人　日本補償コンサルタント協会沖縄支部設立 20 周年を心からお喜び申し上げます。

貴協会におかれましては、伊波盛武支部長を先頭に、日頃より、高度な専門知識と豊かなノウハウを活かし、本市の公共事業の補償業務において、適正かつ円滑な事業執行にご協力、ご尽力されておりますことに深く感謝申しあげます。本市では、「いい暮らしより　楽しい暮らしを」というキャッチフレーズの下、「協働によるまちづくり」を進めておりますが、心豊かに安心して住み続けるためには、市民のための公共事業にかかる適切な補償は暮らしのための基盤として欠くことができないものです。今後とも皆様のお力添えをお願いいたします。

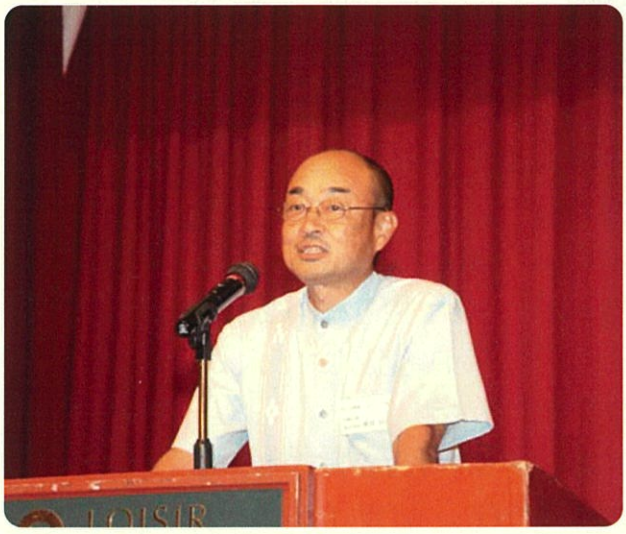
今年は復帰 40 周年の節目の年にあたりますが、本市では古き良き時代のウチナーンチュのチムグクルを大切にしようと、今年度４月から「ハイサイ・ハイタイ運動」に取り組んでいます。市役所窓口での「ハイサイ・ハイタイ」という挨拶も３ヶ月を経て、少しずつ浸透しているところです。会員の皆様においても、窓口で気軽に「ハイサイ」とお声がけしていただければ幸いでございます。

さて、本市にとって来年は、市民待望の新総合庁舎による業務が１月に開始予定であるとともに、４月には中核市への移行を予定するなど、歴史に新たな１ページを記るす記念すべき年となっています。また、今後は津波避難ビルの建設、4 市営住宅の建て替えや、農連市場地区の再開発事業、さらには沖縄都市モノレールの延長も決まり、事業実施に伴う適切で迅速な補償が求められます。円滑に事業を執行していくためにも、貴協会並びに会員各位の協力が不可欠であり、ご協力をお願い申しあげます。ユタシク　ウニゲーサビラ

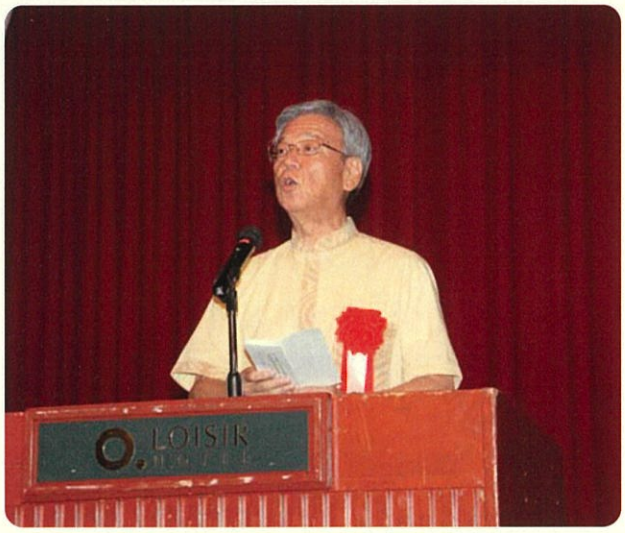
結びに、社団法人日本補償コンサルタント協会沖縄支部のご発展と、会員各位のご活躍、ご健勝を祈念いたしまして祝辞とさせていただきます。

ニフェーデービタン。

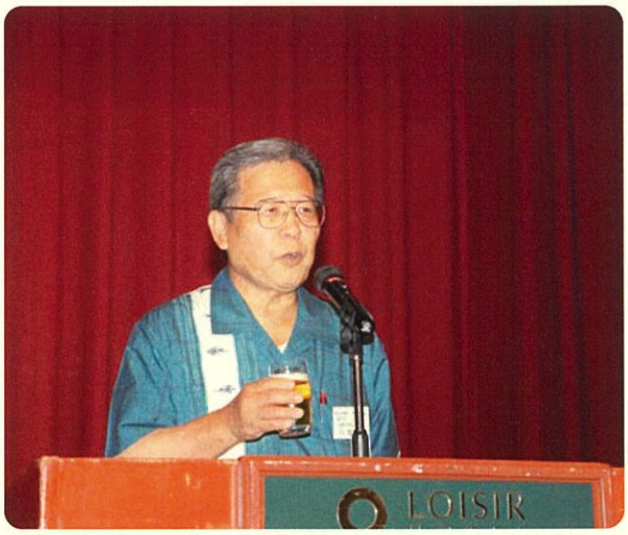
幕開け　「かぎやで風」



主催者挨拶　桃原副支部長



来賓挨拶　翁長雄志那覇市長



乾杯の御発声　川畑副会長

幕開けの演奏・演舞の皆様

琴：国吉裕子　太鼓：小濱総務委員長

桃原副支部長所属の空手道場の演武

桃原副支部長による棒術演武「佐久川の大」

地方の前粟蔵氏、具志堅氏

エイサーの京太郎（チョンダラー）

エイサー演舞の面々

エイサー演舞

エイサー演舞

祝賀会場

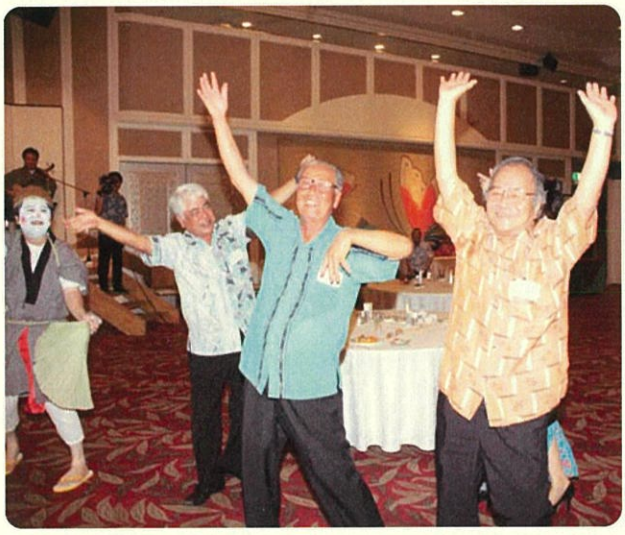
エイサー演舞

翁長那覇市長と高良先生

盛り上がる吉田会長

最後の舞台カチャシー

カチャシー



会場も盛り上がるカチャシー

みんなで踊ろう！

朗らかに！ハイ　チーズ

カチャシー

女子会？

引出物をどうぞ

受付お疲れ様

平成24年7月１２日　（社）日本補償コンサルタント協会沖縄支部設立２０周年記念式典

沖縄支部20年の歩み

年　　譜	支部の主たる活動内容	国内外の主な出来事及び流行語
昭和５２年	県内コンサルタント６社で沖縄支部の母体を結成	
昭和 57 年 西暦１９８２年	九州支部の沖縄県部会として初めて協会に参画 初代県部会長下地恵昭　２代県部会長仲本政雄　３代県部会長島袋精次	
平成４年５月 15 日 5 月 31 日 6 月 1 日 6 月 26 日 西暦１９９２年	沖縄支部設置準備総会 九州支部沖縄県部会解散 沖縄支部設置 支部設置祝賀会及び特別講演実施 講師　建設省建設経済局調整課長　澤井英一氏 ※支部役員会 11 回開催 ※意見交換会 6 回開催 ※業務委員会 16 回開催 ※支部報「うるま」創刊号発刊 初代支部長島袋精次　　会員 18 社	沖縄復帰 20 年 バルセロナ五輪開催 長崎ハウステンボス開園 首里城公園開園 ほめ殺し、冬彦さん 就職氷河期
平成５年５月 11 日 西暦１９９３	通常総会（第 2 回）及び特別講演 演題　「公共用地をめぐる最近の話題」 講師　建設省建設経済局調整課長補佐　山口正久氏 ※補償業務研修会 4 回実施 ※支部役員会 12 回開催 ※起業者との意見交換会 7 回実施 ※各種委員会 8 回開催 ※陳情活動 2 回 ※支部報「うるま」第 2 号発刊 ※会員名簿発刊　　会員 22 社	自民党 55 年体制崩壊 「道の駅」登録制スタート サッカーJ リーグスタート 規制緩和 イエローカード コギャル
平成６年５月 19 日 平成７年２月 28 日 西暦１９９４	通常総会（第 3 回）及び特別講演 演題　「仕事ができるとは、どういうことか」 講師　沖縄総合事務局次長　山口義之氏 用地補償業務研修会 講師　建設省建設経済局調整課公共用地企画官　服部敏也氏 ※支部役員会 10 回開催 ※支部研修会 2 回実施 ※各種委員会 4 回開催 ※起業者との意見交換会 5 回実施 ※起業者への陳情活動実施 ※支部報「うるま」第 3 号発刊 ※会員名簿発刊 支部長 島袋精次　　会員 24 社	関西国際空港開港 自・社・さきがけの村山内閣誕生 松本サリン事件 価格破壊 ドーハの悲劇 バリアフリー

平成７年５月１０日	通常総会（第４回）開催	阪神淡路大震災１／７
	特別講演	地下鉄サリン事件３／２０
	演題　「阪神大震災と沖縄の地震」	
	講師　琉球大学理学部海洋学科教授　加藤祐三氏	
11月20日	用地補償業務研修会	ポア
	講師　建設省建設経済局調整課長　小笠原憲一氏	マインドコントロール
	※支部役員会12回開催	アダルトチルドレン
	※支部研修会の２回実施	
西暦１９９５	※起業者との意見交換会４回実施	
	※起業者への陳情活動	
	※支部報「うるま」第４号発刊	
	※会員名簿発刊	
	支部長 島袋精次　会員24社	
平成８年５月21日	通常総会（第５回）開催	アトランタ五輪開催
	特別講演	英狂牛病騒動
	演題　「21世紀の地域つくり（道づくりを中心に）」	スターバックス珈琲日本に
	講師　沖縄総合事務局次長　古木守靖氏	誕生
平成８年６月29日	演題　「経済心理による起業と人生」	原爆ドーム世界遺産登録
	講師　Ryusenハブオリジン　主宰　高安龍泉	
平成９年１月24日	用地補償業務研修会	
	演題　「公共用地取得の現状と課題」	O-１５７
	講師　建設省建設経済局調整課長　小笠原憲一氏	援助交際
	※支部役員会12回開催	ジベタリアン
西暦１９９６	※各種委員会８回開催	おやじ狩り
	※業務研究会17回実施	
	※起業者との意見交換会３回開催及び陳情活動実施	
	※支部報「うるま」第５号発刊	
	※会員名簿発刊	
	支部長　島袋精次　会員25社	
平成９年５月13日	通常総会（第６回）開催	消費税（5%）↑
	特別講演	基礎年金番号導入
	演題　「アジア地域との共生のために」	東京湾アクアライン開通
	講師　琉球大学法文学部経済学科教授　大城　肇氏	日米間で普天間飛行場返還
	※支部役員会12回開催	基本合意
	※各種委員会１７回開催	
	※支部研修会２回実施	失楽園
西暦１９９７	※起業者との意見交換会２回実施	学級崩壊
	※起業者への陳情活動実施	パパラッチ
	※支部報「うるま」第６号発刊	
	※会員名簿発刊	
	支部長　島袋精次　会員33社	

平成10年5月20日	通常総会（第7回）開催	長野オリンピック2月開催
	特別講演	和歌山毒入りカレー事件
	演題　「アナウンサーとして伝えたいこと」	明石海峡大橋開通
	講師　ラジオ沖縄アナウンサー　屋良悦子氏	サッカーWカップフランス
平成11年3月1日	用地補償業務研修会	大会日本初出場
	演題　「公共用地取得の現状と課題」	
	講師　建設省建設経済局調整課長　馬渡五郎氏	
	演題　「これからの街づくり」	環境ホルモン
	講師　武田大道事務所　会長　武田大道氏	貸し渋り
	※支部役員会13回開催	切れる
	※各種委員会２１回開催	
西暦１９９８	※支部研修会2回実施	
	※起業者との意見交換会3回実施	
	※起業者への陳情活動2回実施	
	※支部報「うるま」第7号発刊	
	※会員名簿発刊	
	支部長　島袋精次　　会員33社	
平成11年5月18日	通常総会（第8回）開催	春の選抜　沖縄尚学が県勢
	特別講演	として初めて優勝
	演題　「公共用地の取得をめぐる現状と課題」	NTT分割
	講師　建設省建設経済局調整課公共用地企画官　渋田和敬氏	
平成12年2月17日	用地補償業務研修会	
	講師　建設省建設経済局調整課長　馬渡五郎氏	だんご3兄弟
	※支部役員会11回開催	着メロ
	※支部研修（独占禁止法の遵守等）２回実施	カリスマ美容師
西暦１９９９	※起業者との意見交換会及び陳情活動の実施	
	※各種委員会6回開催	
	※支部報「うるま」第8号発刊	
	※会員名簿発刊	
	支部長　島袋精次　　会員33社	
平成12年5月17日	通常総会（第9回）開催	有珠山噴火
	特別講演	シドニー五輪開催
	演題　「笑いでユイマール」	白川英樹ノーベル化学賞
	講師　笑築過激団座長　玉城　満氏	三宅島火山噴火
11月20～22日	補償業務管理士共通科目研修実施	金融庁発足
平成13年3月12日	用地補償業務研修会	九州・沖縄サミット
	演題　「公共用地取得をめぐる現状と課題」	おっはー
	講師　国土交通省総合政策局国土環境・調整課	IT革命
西暦２０００年	公共用地室長　及川信男氏	ユニクロ
	演題　「最近の地価動向と土地評価をめぐる諸問題」	ガングロ
	講師　（社）沖縄県不動産鑑定士協会会長　玉那覇兼雄	
	※支部役員会１３回開催	

	※各種委員会２０回開催 ※支部研修の実施 ※起業者との意見交換会５回及び陳情活動の実施 ※支部報「うるま」第９号発刊 ※会員名簿発刊 支部長　島袋精次　　会員 34 社	
平成 13 年 5 月 17 日 平成 14 年 3 月 22 日 西暦２００１	通常総会（第 10 回）開催 特別講演 演題　「補償理論の流れ」 講師　　明海大学不動産学部教授　田辺愛壹 用地補償業務研修会 演題　「公共用地をめぐる最近の話題」 講師　国土交通省総合政策局国土環境・調整課 　　公共用地室長　及川信男氏 演題　「那覇市の街つくりにおける現状と未来」 講師　那覇市都市計画部長　高嶺　晃氏 支部役員会１２回開催 ※支部研修５回/年実施 ※起業者との意見交換会５回実施 ※起業者への陳情平成活動３回実施 ※成果品品質向上推進委員会３回/年開催 ※各種委員会２４回開催 ※創立１０周年記念事業準備委員会２回開催 ※支部報「うるま」第１０号、第１１号発刊 ※会員名簿発刊 支部長　島袋精次　　会員 33 社	中央省庁再編（１府１２省庁） 米国同時多発テロ 9/11 狂牛病（BSE） さいたま市発足 ETC 導入 聖域なき構造改革 抵抗勢力
平成 14 年 5 月 14 日 6 月 1 日 8 月 8 日 平成 15 年 2 月 12 日 西暦２００２	通常総会（第 11 回）開催 特別講演 　演題「島に根ざす」 　講師　藤木勇人氏 沖縄支部設立 10 周年 （社）日本補償コンサルタント協会沖縄支部設立 10 周年記念式典並びに祝賀会の実施 用地補償業務研修会 演題　「公共用地取得の現状と課題」 講師　国土交通省総合政策国土環境/調整課 　　公共用地室長　平山博登氏 演題　「日本経済の再生と沖縄振興」 講師　沖縄国際大学商経学部 　　経済学科　野崎四郎教授 ※業務研修会４回実施	欧州通貨統一（ユーロ） 公立学校完全週 5 日制 サッカーW 杯日韓共同開催 統合失調症に変更 ムネオハウス 疑惑の総合商社 拉致 悪の枢軸

	※起業者との意見交換会４回実施、陳情活動５回実施 ※各種委員会会議３５回開催 ※会員名簿、支部報「うるま」第１２号、第１３号発刊 支部長　島袋精次　　会員 33 社	
平成 15 年 5 月 9 日 平成 16 年 2 月 12 日 ２００３	通常総会（第 12 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地取得の現状と課題」 講師　国土交通省総合政策国土環境/調整課 　　公共用地室長　平山博登氏 演題　「ことばの持つ癒しの力：くとうば・じんじけー」 講師　ラジオ沖縄ニュースキャスター 　　伊狩典子 ※支部役員会 12 回開催 ※補償研修会４回開催 ※起業者との意見交換会実施５回実施 ※陳情活動５回 ※各種委員会 46 回会議開催 ※会員名簿、支部報「うるま」第 14 号、第 15 号発刊 支部長　松川清康　　会員 33 社	沖縄モノレール開通（ゆいレール） サラリーマン医療費３割負担 おれおれ詐欺 人間の盾 三位一体
平成 16 年 5 月 14 日 平成１７年 2 月 17 日 ２００４	通常総会（第 13 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地取得の現状と課題」 講師　国土交通省総合政策国土環境・調整課 　　調整官　長塚邦夫氏 演題　「三つのチャチャチャ」チャンス、チャレンジ、チャーミング 講師　（有）インターリンク沖縄代表　豊川あさみ氏 ※支部役員会 10 回開催 ※補償研修会３回開催 ※意見交換会５回開催 ※陳情活動６回 ※各種委員会 41 回開催 ※平成 16 年度版建物等数量積算特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第 16 号、第 17 号発刊 支部長　松川清康　　会員 33 社	新１万円、５千円、千円札発行（11 月） アテネ五輪開催 新潟中越地震 楽天プロ野球に参入 沖国大米軍ヘリ墜落 年金未納３兄弟 ヨン様 韓流 振り込め詐欺 マツケンサンバ
平成 17 年 5 月 11 日 平成 18 年 2 月 16 日	通常総会（第 14 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地取得の現状と課題」 講師　国土交通省総合政策局国土環境・調整課 　　課長補佐　板倉靖和氏 演題　「ラム酒に思いを込めて」 講師　（株）グレイスラム　代表取締役　金城祐子氏	中部国際空港開港 マル優廃止 日本道路公団分割民営化 平成の大合併

２００５	※支部役員会１２回開催 ※補償研修会２回開催 ※意見交換会８回開催 ※陳情活動８回開催 ※各種委員会 54 回開催 ※平成１７年版建物等数量積算特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第１８号、第１９号発刊 支部長　松川清康　　会員３３社	ノロウイルス チョイワルオヤジ ブルーレイ 小泉チルドレン 小泉劇場
平成 18 年５月 10 日 平成 19 年２月 15 日 ２００６	通常総会（第 15 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地行政の課題と今後の方向性」 講師　国土交通省総合政策局国土環境・調整課 公共用地室長　住本　靖氏 演題　「踊い跳つし 40 年」 講師　　當間武三 ※支部役員会 11 回開催 ※補償研修会３回開催 ※意見交換会３回開催 ※各種委員会３０開催 ※平成１８年版建物数等数量積算特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第 20 号、第 21 号発刊 支部長　松川清康　　会員３３社	トリノ五輪開催 WBC 王ジャパン世界一 サッカーW 杯ドイツ大会 日本郵政株式会社発足 イナバウアー ワンセグ ハンカチ王子 メタボリックシンドローム
平成 19 年５月８日 平成 20 年２月 14 日 ２００７	通常総会（第 16 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地行政の課題と今後の方向性」 講師　国土交通省土地・水資源局 公共用地室長　住本　靖氏 演題　「笑って元気―人生のチャンスは笑顔から」 講師　　（有）セシル・エマ代表取締役　真栄田絵麻氏 ※支部役員会１２回開催 ※補償研修会３回開催 ※意見交換会４回開催 ※各種委員会３１開催 ※平成１９年版建物数量積算特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第 22 号発刊 支部長　松川清康　　会員３３社	防衛「省」に昇格 教授・准教授・助教・助手の新職制 赤ちゃんポスト 「赤福」「比内地鶏」「名古屋コーチン」等の偽装発覚 消えた年金 はにかみ王子 どげんかせんといかん そんなの関係ねぇ！
平成 20 年５月 13 日 平成２１年２月 19 日	通常総会（第 17 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地行政の課題と今後の方向性」 講師　国土交通省土地/水資源局 公共用地室長　松本　啓朗氏 演題　「補償コンサルタント登録規程の改正とその背景」	沖縄尚学二度目の春選抜優勝 北京五輪開催 後期高齢者医療制度スタート 中国四川大地震

2008	講師　内閣府沖縄総合事務局開発建設部 用地課長　時津　純氏 ※支部役員会１２回開催 ※補償研修会４回開催 ※意見交換会４回開催 ※各種委員会４０開催 ※陳情活動８回 ※平成２０年版損失補償算定特記事項を作成 ※会員名簿、支部報第 23 号発刊 支部長　松田喜知　会員３３社	観光庁発足 埋蔵金 燃油サーチャージ 居酒屋タクシー 後期高齢者 消えた年金、消された年金
平成 21 年 5 月 12 日 平成 22 年 2 月 25 日 ２００９	通常総会（第 18 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地行政の課題と今後の方向性」 講師　国土交通省土地・水資源局 公共用地室長　井上　伸夫氏 演題　「暴力団の現状について」 講師　沖縄県那覇警察署　暴力団対策課 暴力犯第一係長　山川　雄三氏 ※支部役員会１２回開催 ※補償研修会４回開催 ※意見交換会６回開催 ※各種委員会３４開催	オバマ氏第４４代米大統領に就任 裁判員制度スタート 衆院選で民主党勝利政権交代 事業仕分け 脱官僚 マニフェスト コンクリートから人へ
平成 22 年 5 月 11 日 平成 23 年 2 月 24 日 ２０１０	通常総会（第 19 回）開催 用地補償業務研修会 演題　「公共用地業務の課題と取り組み」 講師　国土交通省土地・水資源局総務課公共用地室 課長補佐　松島　竜生氏 演題　「沖縄経済と政治について」 講師　琉球新報社　論説委員長　前泊　博盛氏 ※支部役員会１２回開催 ※補償研修会４回開催 ※意見交換会５回開催 ※各種委員会３４開催 ※陳情活動９回 ※平成２２年度版損失補償算定特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第 25 号発刊	興南高校甲子園春夏連覇 サッカーW 杯南アフリカ大会（日本ベスト１６） 朝青龍引退 高速道路無料化社会実験 チリ落盤事故（３３名救出） ２位じゃダメなんですか？ ツイッター AKB48 イクメン

	支部長　松田喜知　　会員３３社	
平成23年5月17日 平成24年2月23日 ２０１１ 平成24年3月30日	通常総会（20回）開催 用地補償業務研修会 演題　「沖縄の振興と事業展開」 講師　内閣府沖縄総合事務局次長　菊池　良介氏 演題　「県内建設業界の現状と課題」 講師　（株）沖縄建設新聞社　代表取締役社長　大久　勝氏 ※支部役員会１２回開催 ※補償研修会４回開催 ※意見交換会５回開催 ※各種委員会２６開催 ※20周年記念事業準備委員会６回開催 ※陳情活動３回 ※平成２３年度版損失補償算定特記事項を作成 ※会員名簿、支部報「うるま」第26号発刊 沖縄総合事務局と災害応急対応協定締結 支部長　松田喜知　　会員３３社	東北地方太平洋沖地震3/11 M9.0 東京スカイツリー完成 （634m） サッカー女子W杯なでしこジャパン優勝 タイの洪水 帰宅難民 メルトダウン シーベルト がんばろう日本 風評被害 なでしこジャパン
平成24年5月16日 **6月1日** **平成24年7月12日** **２０１２年**	通常総会（21回）開催 **日本補償コンサルタント協会沖縄支部設立20周年** **沖縄支部設立20周年記念式典挙行** **記念講演　演題「琉球王国の公共事業とその戦略」** **講師　琉球大学法文学部国際言語文化学科教授** **高良　倉吉氏** **支部長　伊波盛武　　会員33社**	東京スカイツリー開業 ロンドン五輪開催

支部報「うるま」

会　　員　　名　　簿

事　務　局　報（毎月発刊）

年度毎に支部が作成する「損失補償算定要領」

沖縄支部役員等の変遷

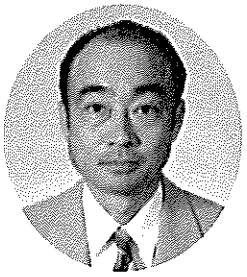
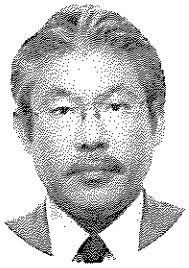
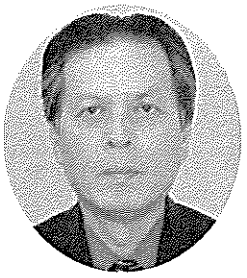
年度	平成４年度	平成５年度	平成６年度	平成７年度	平成８年度	平成９年度
支部長	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次
副支部長	我那覇生順	我那覇生順	松川清康 松田喜知	松川清康 松田喜知	松川清康	松川清康
幹事	松田喜知 島袋寛盛 伊波盛武 天野哲彦 山田義昭 松川清康 国吉真春	松田喜知 島袋寛盛 伊波盛武 天野哲彦 山田義昭 松川清康 国吉真春	島袋寛盛 伊波盛武 天野哲夫 山田義昭 国吉真春 仲程通五郎	島袋寛盛 伊波盛武 天野哲夫 山田義昭 国吉真春 仲程通五郎	松田喜知 桃原昌宏 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎	松田喜知 桃原昌宏 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎
監事	小幡光俊 島袋精秀	小幡光俊 島袋精秀	与那嶺文雄 島袋精秀	与那嶺文雄 島袋精秀	与那嶺文雄 島袋精秀	与那嶺文雄 島袋精秀
相談役	仲本政雄	仲本政雄	仲本政雄 小幡光俊	仲本政雄 小幡光俊	仲本政雄 小幡光俊	仲本政雄 小幡光俊
事務局長	桃原昌宏	桃原昌宏	桃原昌宏	桃原昌宏	伊波盛武	伊波盛武
参与		西盛用謹	西盛用謹			

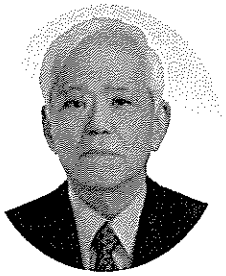
年度	平成１０年度	平成１１年度	平成１２年度	平成１３年度	平成１４年度	平成１５年度
支部長	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次
副支部長	松川清康	松川清康	松川清康	松川清康	松川清康	松川清康
幹事	松田喜知 桃原昌宏 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎 川満義也	松田喜知 桃原昌宏 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎 川満義也	松田喜知 桃原昌宏 伊波盛武 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎 川満義也 玉那覇兼雄 前川朝貞	松田喜知 桃原昌宏 伊波盛武 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 長嶺博文 仲程通五郎 川満義也 玉那覇兼雄 前川朝貞	松田喜知 桃原昌宏 伊波盛武 天野哲彦 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 仲程通五郎 川満義也 玉那覇兼雄 前川朝貞 島袋精秀	松田喜知 天野哲夫 伊波盛武 桃原昌宏 島袋寛盛 山田義昭 小濱定和 川満義也 仲程通五郎 島袋精秀 玉那覇兼雄 前川朝貞
監事	与那嶺文雄 新垣正弘	与那嶺文雄 新垣正弘	仲里吉彦 我那覇生栄	仲里吉彦 我那覇生栄	仲里吉彦 我那覇生栄	仲里吉彦 我那覇生栄
相談役	仲本政雄	仲本政雄	仲本政雄 与那嶺文雄	仲本政雄 与那嶺文雄	仲本政雄 与那嶺文雄	仲本政雄 与那嶺文雄
事務局長	伊波盛武	伊波盛武	天野哲彦	柴田耕治	柴田耕治	柴田耕治
参与	安里裕公	安里裕公				

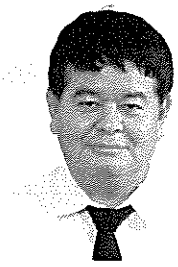
年度	平成１６年度	平成１７年度	平成１８年度	平成１９年度	平成２０年度	平成２１年度
支部長	松川清康	松川清康	松川清康	松川清康	松田喜知	松田喜知
副支部長	松田喜知	松田喜知	松田喜知	松田喜知	伊波盛武	伊波盛武
幹事	伊波盛武 山田義昭 天野哲夫 桃原昌宏 川満義也 小濱定和 仲程通五郎 宮里　明 玉那覇兼雄 仲里吉彦 我那覇生栄 島袋精賢 嘉川　肇 田中清貴 島袋寛盛	伊波盛武 山田義昭 天野哲夫 桃原昌宏 川満義也 小濱定和 仲程通五郎 宮里　明 玉那覇兼雄 仲里吉彦 我那覇生栄 島袋精賢 嘉川　肇 田中清貴 島袋寛盛	伊波盛武 天野哲彦 桃原昌宏 川満義也 小濱定和 仲程通五郎 宮里　明 玉那覇兼雄 島袋精賢 嘉川　肇 田中清貴 島袋寛盛 渡久山楯 具志堅勇 新垣昇盛	伊波盛武 天野哲彦 桃原昌宏 川満義也 小濱定和 仲程通五郎 宮里　明 玉那覇兼雄 島袋精賢 嘉川　肇 田中清貴 島袋寛盛 渡久山楯 具志堅勇 新垣昇盛	桃原昌宏 新垣宏昌 川満義也 小濱定和 島袋精賢 宮里　明 玉那覇兼雄 我那覇生芳 嘉川　肇 新垣昇盛 前川朝貞 具志堅勇 島袋精秀 渡久山楯 仲里吉彦	桃原昌宏 新垣宏昌 川満義也 小濱定和 島袋精賢 宮里　明 玉那覇兼雄 我那覇生芳 嘉川　肇 新垣昇盛 前川朝貞 島袋精秀 渡久山遁 仲里吉彦 福治友次
監事	前川朝貞 新垣宏昌	前川朝貞 新垣宏昌	前川朝貞 新垣宏昌	前川朝貞 新垣宏昌	仲程通五郎 天野哲彦	仲程通五郎 天野哲彦
相談役	島袋精次	島袋精次	島袋精次	島袋精次	松川清康	松川清康
事務局長	柴田耕治	柴田耕治	柴田耕治	新垣健栄	新垣健栄	新垣健栄
参与						

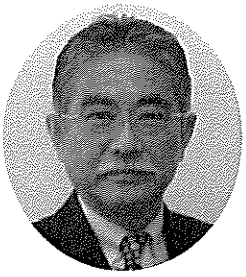
年度	平成２２年度	平成２３年度	平成２４年度
支部長	松田喜知	松田喜知	伊波盛武
副支部長	伊波盛武	伊波盛武	桃原昌宏
幹事	桃原昌宏 島袋精賢 川満義也 小濱定和 宮里　明 嘉川　肇 新垣宏昌 我那覇生芳 我那覇生栄 新垣昇盛 渡久山楯 福治友次 中村哲二 親川　勇 與儀清三	桃原昌宏 島袋精賢 川満義也 小濱定和 宮里　明 嘉川　肇 新垣宏昌 我那覇生芳 我那覇生栄 新垣昇盛 渡久山楯 福治友次 中村哲二 親川　勇 與儀清三	小濱定和 島袋精賢 川満義也 新垣昇盛 嘉川　肇 宮里　明 我那覇生栄 我那覇生芳 福治友次 中村哲二 親川　勇 與儀清三 具志堅力 田中清貴 野原勉
監事	田中清貴 野原勉	田中清貴 野原勉	玉那覇有紀 川平恵正
相談役	松川清康	松川清康	松田喜知
事務局長	新垣健栄	新垣健栄	天久朝和
参与			

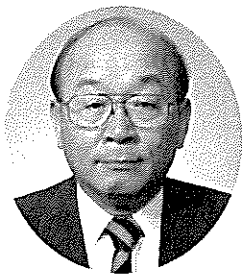
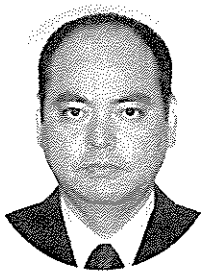
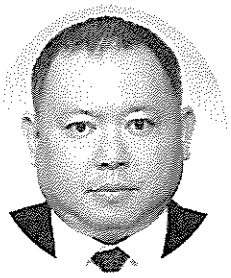
会 員 名 簿

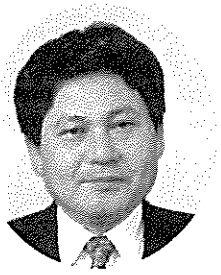
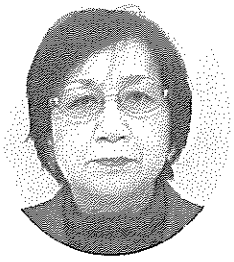
会　社　名	株式会社 沖縄(オキナワ)ランドコンサルタント	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補20第496号　平成20年12月25日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償、補償関連、事業損失	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0024　那覇市古波蔵4丁目7番21号	
TEL・FAX	☎(098)851－8845　FAX(098)851－8846 E-mail:okiland@o-l-c.co.jp	桃原昌宏(トウバル マサヒロ)
会　社　名	株式会社 国土鑑定センター(コクドカンテイ)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補20第483号　平成20年12月25日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償、補償関連	
補償業務管理士	土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0032　那覇市松山2丁目25番17号 (国土RACビル)	
TEL・FAX	☎(098)866－3833　FAX(098)866－3514 E-mail:kunika36@smile.ocn.ne.jp	嘉川肇(ヨシカワ ハジメ)
会　社　名	株式会社 沖縄用地測量設計(オキナワヨウチソクリョウセッケイ)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補20第240号　平成20年12月12日	
登録部門	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒902－0071　那覇市繁多川二丁目14番7-201号 (繁多川ハイツ)	
TEL・FAX	☎(098)854－7776　FAX(098)832－3136 E-mail:info@okiyochi.co.jp	島袋精賢(シマブクロ セイケン)

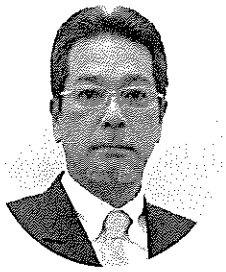
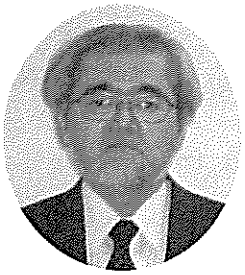
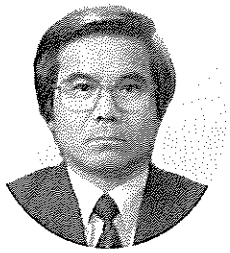
会　社　名	株式会社 松田・伸設計（マツダ・シンセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第576号　平成21年1月9日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償、補償関連、事業損失	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償、補償関連、事業損失	
本社所在地	〒900－0024　那覇市古波蔵4丁目12番8号 （メゾン幸地　1F）	
TEL・FAX	☎(098)855－5422　FAX(098)832－4624 E-mail:shizuka@matsu-m.co.jp	松田喜知（マツダヨシトモ）

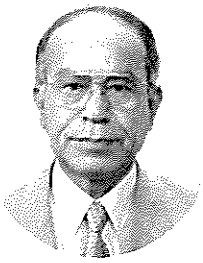
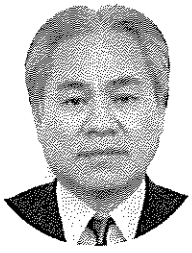
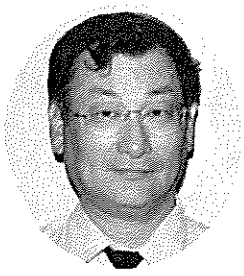
会　社　名	株式会社 沖縄不動産総合鑑定所（オキナワフドウサンソウゴウカンテイショ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第1753号　平成24年10月30日	
登録部門	土地評価、物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0024　那覇市古波蔵4丁目7番5号	
TEL・FAX	☎(098)834－5401　FAX(098)833－1736 E-mail:okisokan@nirai.ne.jp	島袋寛盛（シマブクロカンセイ）

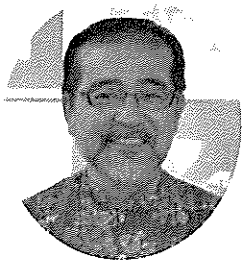
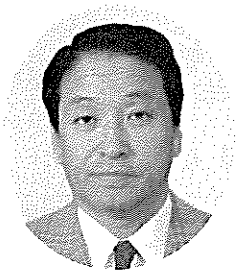
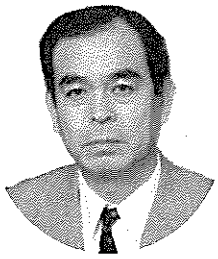
会　社　名	株式会社 沖縄総研（オキナワソウケン）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第1963号　平成21年4月25日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償、 事業損失、補償関連	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0021　那覇市泉崎1丁目6番1号 （ゼニス南西405号）	
TEL・FAX	☎(098)868－2685　FAX(098)868－2376 E-mail:info@o-soken.co.jp	伊波盛武（イハモリタケ）

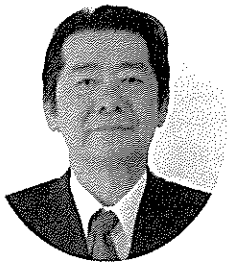
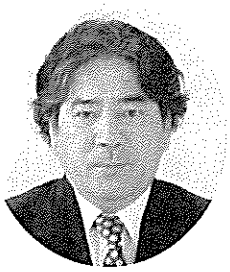
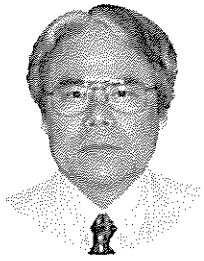
会　社　名	琉球建設コンサルタント（リュウキュウケンセツ） 株式会社	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第916号　平成21年5月14日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償、 事業損失	
補償業務管理士	土地調査、物件、事業損失	
本社所在地	〒901－2132　浦添市伊祖1丁目32番8号	
TEL・FAX	☎(098)879－7147　FAX(098)879－7146 E-mail:info@ryucon.co.jp	天野哲彦（アマノテツヒコ）
会　社　名	株式会社 アサギ総合（ソウゴウ）コンサルタント	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補23第2073号　平成23年11月27日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償、総合補償	
補償業務管理士	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒902－0065　那覇市壺屋1丁目32番9号	
TEL・FAX	☎(098)861－1288　FAX(098)861－1650 E-mail:asagi@ryucom.ne.jp	川満義也（カワミツヨシナリ）
会　社　名	株式会社 アジア測量設計（ソクリョウセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補23第2045号　平成23年9月30日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、物件、営業補償・特殊補償、 事業損失	
本社所在地	〒901－2131　浦添市牧港4丁目4番5号	
TEL・FAX	☎(098)877－6738　FAX(098)879－6607 E-mail:ajia4@mocha.ocn.ne.jp	松川竹丸（マツカワタケマル）

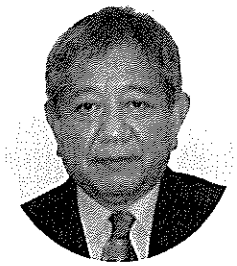
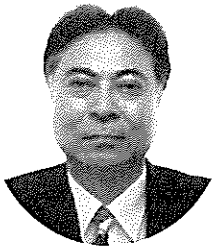
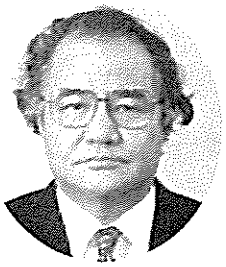
会　社　名	株式会社 国吉設計（クニヨシセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第4632号　平成24年10月30日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償	
本社所在地	〒903－0814　那覇市首里崎山町4丁目206番地	
TEL・FAX	☎(098)885－8284　FAX(098)884－0399 E-mail:kuniyosisekkei@sweet.ocn.ne.jp	国吉真春（クニヨシシン シュン）
会　社　名	株式会社 丸島建設コンサルタント（マルシマケンセツ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第637号　平成21年1月11日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償 事業損失、補償関連	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒902－0071　那覇市繁多川二丁目14番7号	
TEL・FAX	☎(098)854－4588　FAX(098)854－4595 E-mail:info@maru-con.co.jp	島袋精秀（シマブクロ セイ シュウ）
会　社　名	株式会社 与那嶺測量設計（ヨナミネソクリョウセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第776号　平成21年2月25日	
登録部門	土地調査、物件	
補償業務管理士	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連	
本社所在地	〒902－0065　那覇市壺屋1－22－11	
TEL・FAX	☎(098)861－2151　FAX(098)861－9120 E-mail:ynmn-4@nirai.ne.jp	新垣裕子（アラカキ ユウ コ）

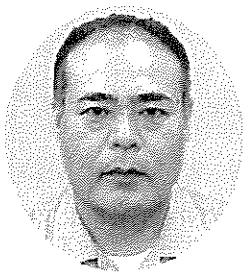
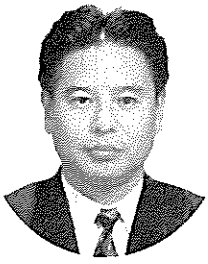
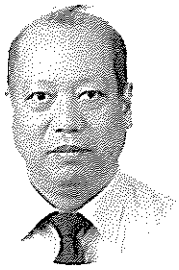
会　社　名	株式会社 鑑定(カンテイ)ソリュート沖縄(オキナワ)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補22第2714号　平成22年4月10日	
登録部門	土地評価、物件、営業補償・特殊補償 補償関連	
補償業務管理士	土地評価、物件、営業補償・特殊補償 補償関連、総合補償	
本社所在地	〒901－0155　沖縄県那覇市金城二丁目11番地4 （エナジー2F）	
TEL・FAX	☎(098)996－1368　FAX(098)996－1373 E-mail:okinawa@solute.co.jp	玉那覇(タマナハ)　兼(ケン)　雄(ユウ)
会　社　名	株式会社 国(クニ)　建(ケン)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第2162号　平成24年3月27日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	営業補償・特殊補償	
本社所在地	〒900－0015　那覇市久茂地1丁目2番20号	
TEL・FAX	☎(098)862－1106　FAX(098)868－3882 E-mail:info@kuniken.co.jp	比(ヒ)　嘉(ガ)　盛(モリ)　朋(トモ)
会　社　名	株式会社 仲里一級建築士事務所(ナカザトイッキュウケンチクシジムショ)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第2643号　平成21年12月16日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	物件	
本社所在地	〒900－0006　那覇市おもろまち4丁目14番11号	
TEL・FAX	☎(098)862－5653　FAX(098)866－5056 E-mail:n-sekkei@gaea.ocn.ne.jp	仲(ナカ)　里(ザト)　吉(ヨシ)　彦(ヒコ)

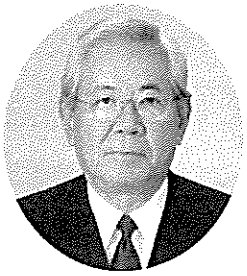
会　社　名	株式会社 大宝(タイホウ)エンジニア	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補23第2036号　平成23年8月30日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償、補償関連	
補償業務管理士	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連	
本社所在地	〒902－0071　那覇市繁多川2－14－7 繁多川ハイツ203号	
TEL・FAX	☎(098)854－4788　FAX(098)833－2049 E-mail:taiho-co@ryukyu.ne.jp	宮里(ミヤザト)　明(アキラ)
会　社　名	株式会社 タップ	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第2497号　平成21年3月31日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償、事業損失	
補償業務管理士	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0002　那覇市曙3－11－26	
TEL・FAX	☎(098)867－8838　FAX(098)867－9024 E-mail:tap1988@woody.ocn.ne.jp	小濱(コハマ)　定和(サダカズ)
会　社　名	株式会社 沖縄地所鑑定(オキナワデショカンテイ)	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補22第2686号　平成22年1月24日	
登録部門	土地調査、土地評価、物件、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連	
本社所在地	〒900－0013　那覇市牧志1－9－8	
TEL・FAX	☎(098)869－0688　FAX(098)869－0689 E-mail:tisyo-oki@woody.ocn.ne.jp	秋田(アキタ)　稔(ミノル)

会　社　名	株式会社 渡久山設計（トクヤマセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補22第2745号　平成22年5月12日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償	
本社所在地	〒901－2131　浦添市牧港2丁目8番4号	
TEL・FAX	☎(098)876－1101　FAX(098)876－8880 E-mail:master@tae.co.jp http://www.tae.co.jp	運天　勲（ウンテン　イサオ）
会　社　名	有限会社 色設計（シキセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補22第2841号　平成22年10月31日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償、補償関連	
本社所在地	〒902－0073　那覇市字上間437番地10 色設計ビル　1F	
TEL・FAX	☎(098)836－3791　FAX(098)836－3792 E-mail:info@sikisekkei.co.jp HP:http://www.sikisekkei.co.jp	田中清貴（タナカ　キヨタカ）
会　社　名	株式会社 エー・アール・ジー	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補18第3030号　平成18年8月30日	
登録部門	土地評価、物件、営業補償・特殊補償 事業損失	
補償業務管理士	土地評価、物件、営業補償・特殊補償 事業損失、補償関連	
本社所在地	〒901－2113　浦添市大平2－19－11	
TEL・FAX	☎(098)877－5556　FAX(098)877－5642 E-mail:arg@arg2000.co.jp	国吉真正（クニヨシ　シンセイ）

会　社　名	株式会社 総合設計玉城（ソウゴウセッケイタマキ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補23第3011号　平成23年7月31日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償、補償関連	
補償業務管理士	土地評価、物件、営業補償・特殊補償 事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒902－0073　那覇市字上間212番地1	
TEL・FAX	☎(098)836－0683　FAX(098)889－5357 E-mail:so-go-ta@athena.ocn.ne.jp	川平恵正（カワヒラシゲマサ）
会　社　名	株式会社 アート設計（セッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補23第2920号　平成23年1月31日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、物件、営業補償・特殊補償 事業損失、補償関連	
本社所在地	〒900－0004　那覇市銘苅3丁目23番16号 （あ～とび～る　5階）	
TEL・FAX	☎(098)863－2913　FAX(098)867－3395 E-mail:art_eng@artsekkei.co.jp	前川朝貞（マエカワトモサダ）
会　社　名	有限会社 すみよし	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補18第3139号　平成18年12月26日	
登録部門	土地調査、物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0034　那覇市東町25－7	
TEL・FAX	☎(098)863－7571　FAX(098)862－4400 E-mail:sumiyosi@mbk.ocn.ne.jp	我那覇生栄（ガナハセイエイ）

会　社　名	株式会社 具志堅建築設計事務所（グシケンケンチクセッケイジムショ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第3176号　平成24年2月26日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償、事業損失	
本社所在地	〒900－0023　那覇市楚辺2－31－9	
TEL・FAX	☎(098)832－1161　FAX(098)832－3728 E-mail:gaenaha@bronze.ocn.ne.jp	具志堅（グシケン）　力（ツトム）
会　社　名	有限会社 三和総合設計（サンワソウゴウセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第3554号　平成21年2月25日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、物件、営業補償・特殊補償 事業損失、補償関連	
本社所在地	〒900－0033　那覇市久米1－7－2	
TEL・FAX	☎(098)863－7567　FAX(098)863－2271 E-mail:sanwa-s@theia.ocn.ne.jp	新垣昇盛（シンガキショウセイ）
会　社　名	株式会社 福治不動産鑑定所（フクジフドウサンカンテイショ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第4589号　平成24年3月29日	
登録部門	土地評価、物件	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、営業補償・特殊補償 事業損失	
本社所在地	〒902－0066　那覇市大道130番地	
TEL・FAX	☎(098)887－2211　FAX(098)887－2212 E-mail:fukuji@abeam.ocn.ne.jp	福治友次（フクジトモツグ）

会　社　名	株式会社 オゼック	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補24第3333号　平成24年12月26日	
登録部門	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒900－0003　那覇市安謝2－28－16	
TEL・FAX	☎(098)860－0288　FAX(098)861－5773 E-mail:ogcc@herb.ocn.ne.jp	中村哲二（ナカムラ テツジ）
会　社　名	株式会社 都市建築設計（トシケンチクセッケイ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第3629号　平成21年8月31日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地評価、物件、機械工作物、営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連、総合補償	
本社所在地	〒901－0151　那覇市鏡原町21－1	
TEL・FAX	☎(098)858－1002　FAX(098)858－2081 E-mail:info@toshik.jp	野原勉（ノハラ ツトム）
会　社　名	株式会社 三杉設計（ミスギ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補21第3542号　平成21年1月25日	
登録部門	物件	
補償業務管理士	物件、営業補償・特殊補償	
本社所在地	〒903－0826　那覇市首里寒川町1－101－10	
TEL・FAX	☎(098)887－6772　FAX(098)887－6773 E-mail:misugi@plum.ocn.ne.jp	與儀清三（ヨギ セイゾウ）

会　社　名	株式会社 有建築事務所（ユウケンチクジムショ）	代表者氏名
登録番号 登録年月日	補22第3804号　平成22年9月28日	
登録部門	物件、営業補償・特殊補償	
補償業務管理士	土地調査、土地評価、物件、機械工作物、 営業補償・特殊補償、事業損失、補償関連	
本社所在地	〒903－0823　那覇市首里大中町1－41－3	
TEL・FAX	☎(098)887－7922　FAX(098)887－2732 E-mail:yu_ken@d3.dion.ne.jp	玉那覇（タマナハ）　有（アリ）　紀（ノリ）

ＪＣＣ沖縄支部報

発行　平成25年3月

発 行 所　社団法人　日本補償コンサルタント協会沖縄支部
〒900-0021　那覇市泉崎１丁目13番８号
（ハーモニー泉崎ビル２Ｆ）
ＴＥＬ　098（869）8570
ＦＡＸ　098（869）4044
http://okinawa.jcca-net.or.jp
mail:okinawa@jcca-net.or.jp